

年報

津山 弥生の里

第5号（平成8年度）

1998

津山弥生の里文化財センター

序

黒塚古墳の発掘調査で三角縁神獣鏡が多数発見され、全国各地が湧いています。

今世紀最大級の発見とマスコミも評価しています。

ここ何年来の経済不況に起因する財政、金融、消費、雇用等々の破綻、低迷で多くの国民が自己防衛に専念していた折の出来ごとだけに、次元が違って不謹慎ですが昨年末の実力日本一を競う有馬記念で女傑のエアーグループ、光実のマーべラスサンデーがゴール前、止まっていたかの如く見せたシルクジャスティスの末脚爆発の差し切りを連想して溜飲の下がる思いであります。

同じ業務に携わっている津山弥生の里文化財センター職員一同、万雷の拍手を送りながら私達もこんなことに遭遇出来たらとちょっぴり思いつつ、より高度な知識・技術を取得し敏速にして確実な成果を上げるよう努力していく所存です。

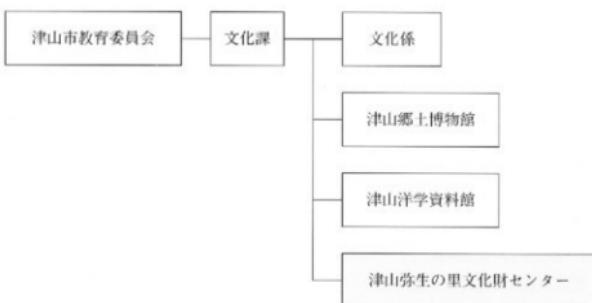
今後も関係者の方々、市民各位のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成10年3月31日

津山弥生の里文化財センター
所長 神田 久遠



津山弥生の里文化財センター機構図



津山弥生の里文化財センター職員配置 (H 10. 3. 31現在)

所長	神田 久遠
次長	中山 俊紀
主査	安川 豊史
〃	行田 祐美
主事	小郷 利幸
〃	坂本 純子 (H 9. 4. 1～)
〃	平岡 正宏
嘱託員	野上 茉子
〃	岩本えり子
〃	江見 祥生
〃	家元 弘子
臨時	浅岡 美恵 (～H 9. 7. 31)
〃	広政 美智子 (H 9. 4. 1～H 9. 11. 30)
〃	八幡 佳奈絵 (H 9. 8. 1～H 10. 3. 31)
〃	丸正 佳苗 (H 9. 12. 1～)

目 次

1. 津山弥生の里文化財センター事業概要	1
(1) 展示事業	1
a. 入館者数	1
b. 民俗資料の整理	2
c. 民俗資料紹介	2
d. 啓発・普及活動	4
e. 寄贈資料	5
(2) 文化財センター日誌抄	5
(3) 埋蔵文化財発掘調査	8
平成8年度発掘調査一覧	8
(4) その他の事業	10
(5) 調査の概要	11
a. 五反田古墳群発掘調査報告	12
b. 天神原遺跡・天満神社1号墳の調査	22
c. 河辺小学校裏古墳群発掘調査報告	31
d. 個人住宅建設に伴う美作国分寺跡確認調査	45
e. 市道T110・T112号線道路改良工事に伴う美作国分尼寺跡確認調査	51
2. 資料紹介・研究ノート	55
津山城今昔～大手門の面影～	56

例 言

1. 本書は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センターが平成8年度に実施した事業概要についてまとめたものである。

1. 埋蔵文化財の発掘調査は、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、小郷利幸、平岡正宏、庶務を坂本裕子、出土遺物の整理は野上恭子、岩本えり子、家元弘子、民俗資料の整理は江見祥生が主として担当した。本書の執筆は各担当者がおこない、編集は小郷がおこなった。

1.津山弥生の里文化財センター事業概要

(1) 展示事業

◆入館者数

当センターは開館してから、今年で7年目を迎え、入館者数は平成8年度末現在で延べ46,603人に達しました。8年度も、高・大学生はあいかわらず減少の傾向にありますが、小・中、老人は微増しています。

昨年度の入館者数は下表のとおりです。

平成8年度総利用者数内訳

区分/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間合計
般	306	390	250	204	365	215	249	223	91	71	63	144	2,559
高・大	8	13	2	49	22	2	4	2	12	0	20	21	155
小・中	367	436	90	150	235	36	230	121	7	9	217	222	2,120
老人	40	8	8	5	13	0	2	3	3	0	85	4	171
合計	721	847	350	408	623	253	485	349	113	80	385	391	5,005

利用団体数及び人數

団体	数	4	6	2	4	1	2	5	2	0	0	3	2	計	31
人 数	333	482	107	199	33	60	243	149	0	0	268	196	計	2070	

団体の内訳

月	日	団体名	人数
4	11	久米南町役場	36
	19	林田小学校6年	97
	23	樅原西小学校6年	60
	26	鶴山中学校1年	140
5	2	弥生小学校	119
	2	鶴山小学校	93
	2	高倉小学校	53
	2	東小学校	91
	22	輔多親和会(鶴山市)	64
	24	山本町文化財保護協会(呑川町)	62
6	9	古代古器を語る会	72
	22	高松小学校6年P.T.A.(久米町)	35
7	4	弓削小学校6年(久米南町)	30
	4	南瀬旅行センター(大阪府)	73
	9	津山工業高等専門学校5年	37
	23	ノートルダム清心女子大学付属小学校(岡山市)	59
8	17	津山柔道教室	33
	13	長寿学園	30
	25	老人大学(兵庫県山崎町)	30
9	4	南小学校6年	77
	4	河辺小学校3年	58
	23	風土記の丘友の会(島根県)	30
	24	南北地区電気技術者協会(高梁市)	30
	29	大崎小学校	48
10	1	順山小学校3年	80
	10	あしながP.W.パーク10	69
	6	弥生小学校3年	97
	10	東苦田地区文化財を守る会	85
11	13	東小学校	86
	4	林田小学校3年	79
	7	鶴山小学校3年	117

◆民俗資料の整理

- ① 今年度は、牛や馬の鞍を整理し、痛まないように鞍の台に乗せました。
- ② 細工物（籠、貯等）の材料の実物を揃え、見学者に分かりやすいように展示しました。
- ③ 阿波村のご好意で、参考品として炭俵二俵（昭和13年までの円形俵と、それ以後の四角俵）をいただきました。深く感謝し、一番見やすい場所に展示しました。
- 最近は、炭俵など見ることも、触ることもないせいか、見学者のお年寄りのなかには歓声を上げ、仲間同士の昔話に花を咲かせる人や、連れの若い人に説明をされる人もおられました。
- 今年も重要な民俗資料及び展示に関する貴重な御意見をたくさんいただきました。有り難うございました。
(江見祥生)



鞍の展示風景 ①



鞍の展示風景 ②



材料展示風景

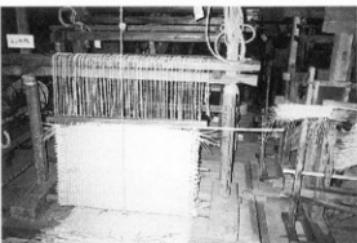


炭俵展示風景

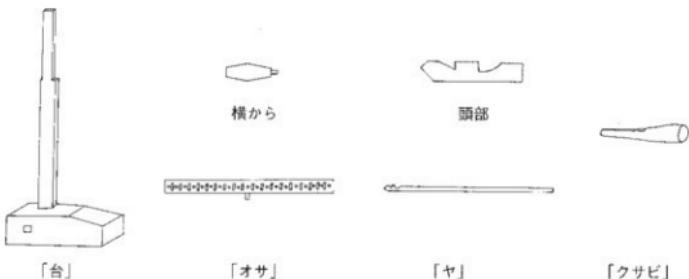
◆民俗資料紹介

今回は、「ムシロ機」を紹介します。

これも、昔の農家には1台はあったもので、土間に置かれ、ムシロやコモ（荷の外側を巻く）、カマギ（幅が小さい）を織る機です。



これは「台」、「オサ」、「ヤ」「クサビ」などから構成されます。(下図)



これについて、主にその材料について幾つかの聞き取り調査を行いました。(1997.8)

(協力していただいたのは、去年お世話になった津山市綾部の農家の梶岡辰男氏です)

①「ムシロ機」は誰が作っていたのですが。

普通は大工が作っていました。農家ではよう（よく）作りませんから。上手には。

②「台」は材料に何を使いましたか。

松を使ってました。松は中国山地にはなんぼでも（幾らでも）ありました。最も手軽に手に入り、一番安い、それに、すぐい（直）所が多いから手がかかるんですが。

③「オサ」の材料は何ですか。

樺を使ったです。重いし、狂いが無い。「オサ」には丸い穴と長四角の穴が表裏にあいていますが、これは経糸を交差させるためのもので、とても大事な物だから正確になっていなければ役にたちませんが。

④縫糸の藁はどのような藁を使いましたか。

長い藁がいいです。今の藁とはものが違います。昔の藁は大人の背丈位の高さがありました。筋の間でも30cmはありました。晩生のモチ藁が一番上等なんです。これは柔軟性があるんでな。ウルチの藁はまあ二番目といいです。

⑤経糸の藁はどのような藁を使いましたか。

やっぱり晩生のモチ藁が一番です。柔軟性があって。ウルチの藁も使います。普通の小繩にして使うんです。だから長さは別に言いません。

⑥「クサビ」はどのような機能があるのですか。

経糸を張るのに使います。使わないときや仕事が終わった後は、これをゆるめておかないと機が痛んでしまいます。経糸はいつもピンとしとく（しておく）ものじゃない（ものではない）んです。復元品も気を付けてくださいよ。

⑦「クサビ」は打ち込むのですか。

いいや。「クサビ」の頭を見てみなさい。あまりたいたい跡がありますまい。上の二本の横木の間に「ヨキ」の頭を差し込んで柄をさげると横木の間があく、そこで「クサビ」を差し込むんです。横木の端のとこに「ヨキ」を差し込んだ跡がありましょう。



ヨキを差し込んだ跡



津山市文化財調査報告会

以上の回答が得られました。

当センターでは「ムシロ機」を復元、可動状態にしております。一度挑戦してみませんか。 (江見)

◆啓発・普及活動

【刊行物】

- 『年報 津山弥生の里第4号』
- 『西古田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集
- 『有本古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集
- 『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集
- 『永見星散跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第61集

【講演会・研究会】

★第15回 津山市文化財調査報告会

平成9年3月8日（土）場所 津山市総合福祉会館

講演

「今、出雲が面白い」

鳥取県埋蔵文化財調査センター 足立克巳先生

調査報告

「有本古墳群の調査」

津山弥生の里文化財センター

小郷利幸

「日上歟山古墳群の調査」

〃

坂本心平

「幕末の高瀬舟をめぐる諸事件」 津山郷土博物館

小島 徹

★美作者古学談話会

第1回 5／18（土） アースオープンによる調理実験（坂本心平）

第2回 7／6（土） 年輪年代法と弥生時代の年代観の変遷（中山俊紀）

第3回 9／7（土） 弥生時代の墓地と特殊器台について（小郷利幸）

第4回 11／2（土） 美作国府と郡衙（安川豊史）

第5回 1／18（土） 院庄船跡について（行田裕美）

第6回 3／15（土） 佐良山古墳群の見学（平岡正宏）

★発掘調査速報展

「津山の歴史を掘る」平成6年度速報展

平成8年4月1日～平成9年3月31日

展示遺跡及び主要な出土品

野村高尾遺跡（津山市野村）

弥生土器、石器（石斧・石包丁）、玉類（ガラス小玉）

美作國府跡（津山市総社）

瓦、土師器、勝間田焼

日上天王山古墳（津山市日上）

鏡（撰文鏡）、土師器

長嶽山北11号墳（津山市西吉田）

須恵器、鉄器（刀・鎌）、耳環、玉類（ガラス小玉）

◆寄贈資料

【民俗資料】

竹本正男	計り1点、天秤秤1点、炬燵のカマ1点
梶岡辰男	斗柄1点
秋山毅	鍛冶屋道具一式130点、金床1点、ふいご1点、看板他19点
光井由典	糸紗1点、糸棒台1点、その他3点
出雲大社美作別院	御神符版本1点、兼頭1点、底守り板札1点、底守り御幣1点
瀬島耕一	足踏みミシン1点
安藤幸夫	大釜3点
河本実	繩11点
松田茂生	牛の鞍1点
岸本佳一	牛の鞍2点、四脚1点、味噌樽1点、牧草刈縫1点、左鎌1点、除草機1点

（2）文化財センター日誌抄

4月18日 近藤義郎先生御夫妻、田邑丸山古墳群発掘調査視察のため来所。

4月19日 日上の山田若也さん歴山古墳群について問い合わせのため来所。

津山市街地内開発準備組合山下さん他、民俗資料の収蔵について問い合わせのため来所。

4月22日 津山市立北小学校6年生案内のため、美和山古墳群に出向く。

4月25日 永礼課長、中山次長、岡山県都市埋蔵文化財広域調査体制研究協議会出席のため岡山市役所に出張

5月11日 中央町立堺和小学校5・6年生団体見学。

5月13日 一方の近藤悟さん他の案内で、神奈備山路査。

5月16日 上斎原小学校団体見学。

5月18日 弥生小学校児童クラブ団体見学。

5月27日 津山やよいライオンズクラブ寄贈沼遺跡説明版、標柱等の引き渡し式。藤原教育長他出席。

5月29日 勝田東小学校団体見学。

5月30日 第1回史跡津山城跡整備委員会に中山、行田出席。

6月4日 津山市施設巡り見学案内。

6月5日 高砂市教育委員会の藤原さん議員視察依頼のため来所。

- 6月8日 成名小学校、津山市社会福祉協議会団体見学。岡山県立博物館田村学芸員テーマ展示のため民俗資料調査に来所。
- 6月12日 岡山大学稲田孝司先生、報告書持参。
- 6月13日 富小学校団体見学。
- 6月19日 岡山県立博物館特別展のため民俗資料貸出。
- 6月28日 加古川市議会議員視察。
- 7月4日 行田主査、小郷主査東徳久遺跡調査のため佐用町に出張。
- 7月14日 大澤正己さん、真鍋成史さん鉄滓調査のため来所。
- 7月18日 岡山大学学生難波さん、資料調査のため来所。
- 7月26日 津山総合流通センター発掘調査現場で親子発掘調査教室開催。
- 7月31日 日上歿山古墳群調査指導のため、古代吉備埋蔵文化財センター所長河本清さん、文化財保護主査易伯通さん来所。
- 8月5日 倉敷埋蔵文化財センター綾野早苗さん、ガラス玉資料分析打ち合わせのため来所。
- 8月6日 文化庁記念物課調査官西田健彦さん、岡山県教育委員会文化課課長補佐白井洋輔さん、主任佐々木正久さん歿山古墳群調査指導のため来所。
- 8月7日 西田調査官、岡山県文化課參事鶴原克人さん、主任佐々木正久さん歿山古墳群発掘調査現地指導。企画広報課主催の親子バッスター見学案内。津山やよいライオンズクラブ沼遺跡早朝草刈奉仕作業。
- 8月12日 日上天王山古墳発掘調査団報告書作成のため合宿（14日まで）
- 8月19日 今井堯卿夫妻来所。倉敷市綾野早苗さん来所。
- 8月18日 日上歿山古墳群現地説明会開催。
- 8月27日 岡山県立博物館民俗資料返却。津山朝日新聞小山健三さん他見学のため来所。
- 9月3日 江田五月さん、神崎市議会議長来所。
- 9月6日 兵庫県美方町文化財保護審議委員会視察。
- 9月10日 倉敷埋蔵文化財センター綾野早苗さん、同小野雅明さん資料貸出のため来所。
- 9月16日 親太郎古代体験会リハーサル。
- 10月1日 下竹莊小学校団体見学。
- 10月2日 東広島市教育振興財團視察。
- 10月11日 「親太郎」招致の鳥取県湖南中学校修学旅行生受け入れ、古代体験会実施。
- 10月15日 津山市教育委員、流通センター発掘現場、史跡美和山古墳群視察案内。
- 10月17日 岡山大学学生資料調査。
- 10月18日 江見商業高校 横山教諭に天王山古墳石材鑑定指導を受ける。岡山理科大学自然科学研究所白石純さん、分析資料採取のため来所。



文化庁西田調査官指導風景

- 10月23日 奈良県都市会計研修会見学。
- 10月29日 県下10市監査委員研修会見学。
- 10月30日 大佐町大井小学校団体見学。
- 11月1日 倉敷埋蔵文化財センター・絶野早苗さんガラス玉分析のため来所。
- 11月7日 交野市教育委員会真鍋成史さん来所。
- 11月18日 岡山県教育委員会文化課課長補佐平井勝さん来所。
- 11月20日 柏原市北野重さん、天理大学山内紀嗣さん、交野市真鍋成史さん・神郷町大成たら発掘調査現場見学。(中山、行田同行)
- 11月26日 サンタフェ市一行見学案内。総社市長良教育集会所運営委員団体見学。
- 11月28日 N H K の連続テレビ小説「あぐり」ロケのため民俗資料貸出。
- 12月4日 岡山県文化課平井勝さん、若林一憲さん来所。
- 12月5日 行田主査、平岡主事、白石大谷遺跡視察のため宍道町に出張。
山陽新聞大石記者取材のため来所。
- 12月6日 文化財保存計画協会木下寿之さん、佐藤千香さん津山城整備調査のため来所。早稲田大学
大学院水野敏典さん、天王山古墳遺物写真撮影のため来所。
- 12月11日 R S K 小板剛生記者流通センター発掘調査現地取材打ち合わせのため来所。
- 12月12日 N H K 「あぐり」ロケ使用の民俗資料返却。
- 12月16日 ノートルダム清心女子大教授高橋謙さん、岡山市教育委員会乗岡実さんに出土遺物の指導
を受けるため中山、行田岡山市に出張。
- 12月17日 東京都立大学助手澤田秀実さん、広島大学大学院増田直人さん他学生十数名来所見学。
- 12月20日 京義町文化協会浅野たみさん来所。
- 12月24日 勝浦美作男市議来所。
- 1月8日 福井在住の刀工安藤幸夫さんから、鋳造大釜2点の寄贈を受ける。
- 1月14日 岡山県古代古墳文化財センター主催の埋蔵文化財研修会に行田主査、平岡主事参加。
- 1月30日 城西国際大学講師倉林真砂斗さん、都立大学助手澤田秀実さん来所。
- 2月6日 第2回史跡津山城跡整備委員会に行田主査出席。
- 2月10日 近藤義郎先生、岡山県教育委員会文化課参考葛原克人さん・田邑丸山古墳群発掘調査現地指導。
仮称「東苦田地区文化財を守る会」団体見学。
- 2月15日 古代古墳文化財センター弘田和司文化財保護主事資料調査のため来所。
- 2月18日 聰田小学校3年生団体見学。
- 2月20日 不燃物処理場切土予定地分布調査。
- 2月25日 岡山県古代古墳文化財センター所長河本清さん、次長高塚恵明さん・田邑丸山古墳群発掘調
査現地指導。
- 2月26日 清山やよいライオンズクラブ吉田さん、藤田さん、沼瀬幹整備作業打ち合わせのため来所。
- 3月4日 近藤先生、田邑丸山古墳群発掘調査現地指導。
- 3月7日 城西国際大学倉林真砂斗さん、田邑丸山古墳群発掘調査現地見学。
- 3月12日 岡山県教育委員会文化課課長補佐平井勝さん来所。
- 3月28日 東京都立大学助手澤田秀実さん一行、田邑丸山古墳群発掘調査現地見学。

(3) 埋蔵文化財発掘調査

平成8年度発掘調査一覧

No.	道跡の種類及び名称	所 在 地	調査原因	調査種別	調査期間	遺構・遺物等	備 考
1	基壇跡 荒神崎遺跡	戸島657地	流通センター建設	発掘調査	通 年	住居跡、貯藏穴他、脊生土器、ガラス製勺・カ鉢	
2	散布地 未定	高野本郷1482	住宅建設	立会	4月8日	遺構・遺物なし	
3	散布地 伝承A散布地	二宮大成1549	住宅建設	立会	6月4日	遺構・遺物なし	
4	散布地 未定	押入浜423-2	住宅建設	立会	7月26日	遺構・遺物なし	
5	集落跡 古墳跡	二宮735-1	住宅建設	立会	5月30日、31日、 10月30日	遺構・遺物なし	
6	古 墓 天満神社1号墳	河辺1406-2	老人健保施設建設	発掘調査	発掘 5月31日、 木 6月12日、6月8日	円墳、須恵器、刀、 建物跡、勞生土器	本書
7	集落跡 天神原遺跡	河辺387-1	住宅建設	立会	8月2日	遺構・遺物なし	
8	散布地 未定	日上1401-3	住宅建設	立会	7月3日	遺構・遺物なし	
9	周壁跡 永見丘遺	山下97-1	觀光センター建設	発掘調査	発掘 6月10日、 木 6月1日～7月29日	縦器、瓦	第61集
10	官街跡 美作田中町跡	小原植/FT8-1	アパート建設	立会	2月4日	遺構・遺物なし	
11	散布地 未定	高野本郷1707-14	資材置場造成	立会	9月30日	遺構・遺物なし	
12	散布地 未定	山方341-1	資材置場造成	立会	10月18日	遺構・遺物なし	
13	散布地 未定	草加郡954-1	病院建設	立会	11月19日	遺構・遺物なし	
14	散布地 未定	河辺954-1	駐車場造成	立会	12月15日	遺構・遺物なし	
15	集 落 高橋谷遺跡	山北327-1	宅地造成	確認調査	10月8日	遺構・遺物なし	
16	社寺跡 美作国分寺跡	岡分寺317-5	住宅建設	確認調査	10月23日～29日	墳堤基礎7、溝、瓦、 須恵器、櫻窓田焼	本書
17	龜游跡 二宮跡	二宮736-4	住宅建設	立会	12月2日	遺構・遺物なし	
18	散布地 未定	高野本郷254-5	進入路建設	立会	12月2日	遺構・遺物なし	
19	古寺跡 美作国分寺跡	国分寺469	住宅建設	立会	2月3日	遺構・遺物なし	
20	散布地 未定	福井2427-1	工場敷地造成	立会	11月20日、25日	遺構・	
21	散布地 未定	河辺952-1	遊び場建築	立会	4月9日、12日	遺構・遺物なし	
22	古 墓 五反田古墳群	植398-1	資材置場造成	発掘調査	12月13日～1月16日	円墳2基、鐵錠、劍	本書
23	散布地 未定	山方1195-1	宅地造成	立会	1月13日、2月3日	遺構・遺物なし	
24	社寺跡 美作国分尼寺跡	日上84	市道改良	発掘調査	5月21日～22日	須恵器、崩闕陶瓦、瓦	本書
25	官街跡 美作田中町跡	絹社40	下水道工事	立会	8月23日～	遺構・遺物なし	
26	古 墓 日上鶴山古墳群	日上434-1	字術調査	発掘調査	6月3日～9月17日	方墳1基、円墳1基、 須恵器、土師器、鐵錠他	
27	散布地 未定	林田1875-1	通信施設建設	確認調査	平成9年9月4日～5日	遺構・遺物なし	
28	古 墓 河辺小字授古墳群	国分寺501	学校増築	発掘調査	3月5日～31日	円墳2基、須恵器、 土師器、鐵錠車	本書
29	城下町 津山城下町開拓遺跡	元魚町32-12	内閣労働事	発掘調査	2月12日～3月5日	礫石建物跡、溝他、 肥前陶短、其他	
30	社寺跡 美作国分尼寺	日上118	住宅建設	立会	2月15日	遺構・遺物なし	
31	集落跡 天神原遺跡	河辺310-1	アパート建設	確認調査	2月27日	遺構・遺物なし	
32	官街跡 美作田中町跡	綾社33-43	アパート建設	発掘調査	1月30日～3月12日	建物跡、溝他 須恵器、土師器、瓦他	



日上歛山古墳群現地説明会



荒神峪遺跡現地説明会

◎現地説明会

平成8年8月18日（日）

日上歛山古墳群（1・35号墳）約80名参加

平成8年12月14日（土）

荒神峪遺跡・有元遺跡 約110名参加

(4) その他の事業

★埋蔵文化財分布調査

平成9年2月27日～3月11日

津山市東一宮・東田辺地域

★遺跡の保存・管理

美和山古墳群草刈、1号墳墳丘斜面芝張り

沼遺跡草刈

井口車塚古墳草刈

正仙塚古墳草刈

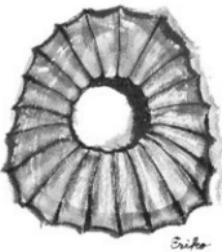


◀ 美和山1号墳芝張り風景



◀ 沼遺跡草刈剪定風景

(5) 調査の概要



五反田古墳群発掘調査報告

1 遺跡の位置と立地（第1図）

五反田古墳群は岡山県津山市樋562番地に所在する。遺跡は加茂川左岸の小規模な沖積地を見下ろす小高い丘陵上に存在する。その標高は約150mであり、沖積地からの比高差は約20mである。なお、遺跡地図には今回調査を行った2基の存在する丘陵上に方墳がもう1基、また北東側の谷を挟んだ丘陵上に円墳が5基、の合計8基が五反田古墳群として記載されているが、北東側の丘陵は既に削平されており、また隣接するもう1基についても既に消滅していた。

2 五反田古墳群と周辺の遺跡

五反田古墳群の北西側には加茂川を挟んで草加部工業団地が造成されており、それに伴い多数の遺跡が調査されている。工業団地内の遺跡を中心にして周辺の遺跡の概要を述べていくことにする。

縄文時代に属するものとしては、東蔵坊遺跡B地区から楕円押型文や磨り消し縄文の土器とサヌカイト製の石器などがわずかに出土しているに過ぎない（註1）。弥生時代の遺跡は、中期以降の集落遺跡として船込遺跡（註2）、橋荷遺跡（註3）、東蔵坊遺跡（註4）、上部遺跡（註5）、緑山北遺跡（註6）などが知られている。また五反田古墳群の南側には弥生時代後期の方形墓才ノ崎遺跡（註7）が存在する。古墳時代になると円墳5基で構成される船込古墳群（註8）、同じく円墳3基で構成される策瀬古墳群（註9）、単独で存在する木棺直葬のニレノ木南古墳（註10）、横穴式石室の東蔵坊1号墳（註11）、緑山A1号墳（註12）などが存在する。これらはいずれも谷に面して存在する小規模な円墳であり、6世紀から7世紀にかけてのものである。さらに五反田古墳群の南側には前期の近長丸山古墳群（註13）、全長約45mの前方後円墳を含む近長四ツ塚古墳群（註14）、円墳4基の才の崎古墳群（註15）などがある。また本遺跡の南側の尾根上には7世紀前半に位置づけられる製鉄炉と横口付き窯をもつ緑山遺跡（註16）が、また横口付き窯が1基発見された緑山北遺跡（註17）も存在している。

（註1）安川豈史「東蔵坊遺跡B地区」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集』津市教育委員会 1981年

（註2）工業団地造成に伴い1976～78年草加部工業団地埋蔵文化財発掘調査委員会が調査、報告書未刊

（註3）中山俊紀・保田義治「小原B・橋荷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集』津市教育委員会 1990年

（註4）（註1）

（註5）安川豈史「上部遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第30集』津市教育委員会 1990年

（註6）行田裕美・平岡正宏「緑山北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第53集』津市教育委員会 1994年

（註7）中山俊紀「才ノ崎遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』津市教育委員会 1985年

（註8）（註2）

（註9）行田裕美「策瀬古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集』津市教育委員会 1981年

（註10）1976年津市教育委員会が調査。

（註11）（註1）

（註12）中山俊紀「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集』津市教育委員会 1986年

（註13）小野利幸「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集』津市教育委員会 1992年

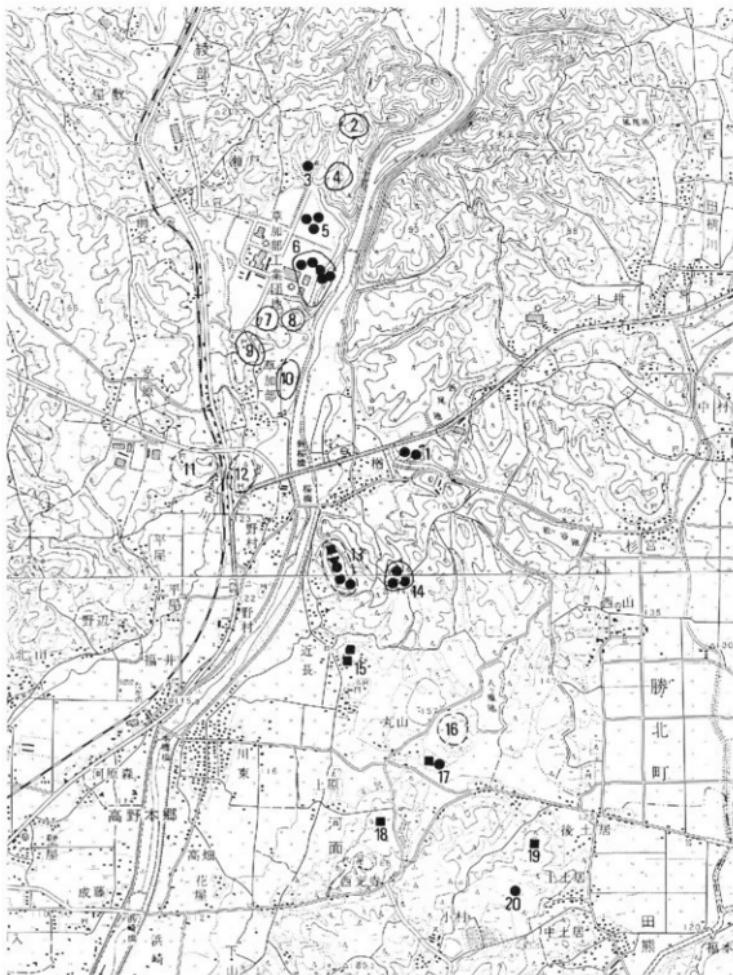
（註14）「近長四ツ塚古墳」『津山の文化財』津市教育委員会 1983年

（註15）（註7）

中山俊紀「才ノ崎古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集』津市教育委員会 1988年

（註16）（註12）

（註17）（註6）



- | | | | | |
|-------------|---------------|---------------|------------|------------|
| 1. 五反田古墳群 | 2. 緑山北道路 | 3. 緑山 A 1 号墳 | 4. 緑山遺跡 | 5. 采薙古墳群 |
| 6. 附込遺跡 | 7. 東鹿坊遺跡 A 地区 | 8. 東鹿坊遺跡 B 地区 | 9. 上部遺跡 | 10. 稲荷遺跡 |
| 11. 狐塚古墳群 | 12. 片山古墳群 | 13. 近長四ツ塚古墳群 | 14. 才ノ継古墳群 | 15. 夫婦塚古墳 |
| 16. 大池ノ西古墳群 | 17. 近長丸山古墳群 | 18. 河面丸山古墳群 | 19. 上土居古墳 | 20. 愛宕神社古墳 |

第1図 位置と周辺の遺跡

3 調査の経過

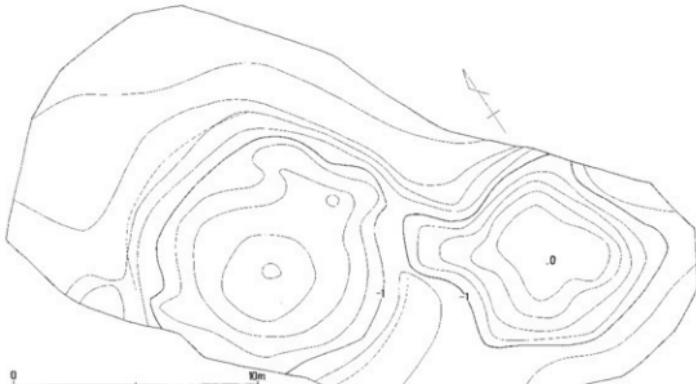
平成8年12月3日付けで、南野田砂利製造販売代表取締役甲田甫から、津山市樋地内において資材置き場の造成のため、文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘届が提出された。工事対象面積は16,307m²である。当該敷地内には周知の遺跡として2基の古墳の存在が明らかとなっていたため、発掘調査が必要である旨を伝えたところ、同日付けで同じく(有)野田砂利製造販売代表取締役甲田甫から埋蔵文化財発掘調査依頼が津山市教育委員会教育長松尾康義宛に提出された。そこで津山市教育委員会主査行田裕美と同主事平岡正宏が現地を確認したところ、当該古墳以外の土地は既に掘削されており、2基の古墳のみが崖の上に残されている状態であり、早急な調査が必要と判断した。そこで12月5日付けで文化庁長官宛に文化財保護法第98条の2第1項の規定により、埋蔵文化財発掘調査通知を提出し、発掘調査を実施した。なお古墳群の名称は五反田古墳群とし、分布調査時の番号に従い、西側を2号墳、東側を3号墳とした。

発掘調査は平成8年12月13日から平成9年1月16日まで調査を行った。調査面積は約150m²である。

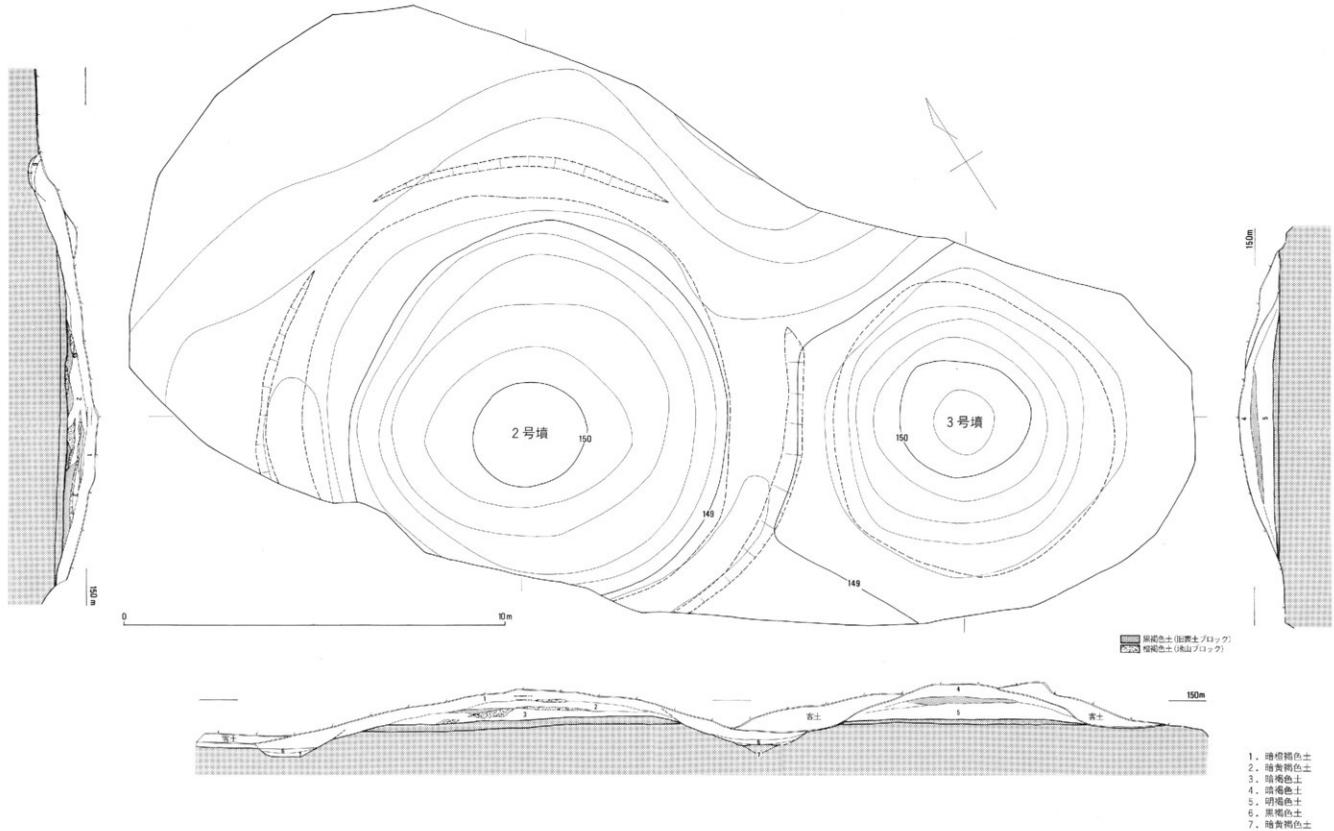
4 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

津山市教育委員会 教育長	松尾 康義
教育次長	中尾 義明
文化課長	朝山三千穂
文化財センター所長	神田 久遠
次長	中山 俊紀
(調査担当) ウ () ウ	主査 行田 裕美 主事 平岡 正宏
(整理担当)	行田裕美 平岡正宏 野上恭子 岩本えり子 家元弘子
(発掘作業員)	梶岡辰男 高山 守 竹内誠介 藤沢淳一郎



第2図 横五反田古墳群調査前地形測量図 (S = 1 : 200)



第3図 五反田古墳群調査後地形測量図 (S = 1 : 100)

5 調査の記録

a. 2号墳（第3図）

墳丘

2号墳は調査着手前には見かけ上径約12m、高さ1.4m程の背の低い円墳状を呈していた。南側にわずかに周溝状を呈する浅い窪みが認められたが、明確ではなかった。また墳丘やその周間に後世の客土が存在し、表面はかなり凹凸のある状態であった。また、直径に対し高さが低く、墳丘自体もかなりの削平あるいは土砂の流出があったことを示していた。

表土除去後は径約11m、高さ1~1.4mの円墳となり、幅1~2mの周溝が北側と東側に一部途切れながら巡っている。墳丘は平らな地山上に周溝を掘り込むように作られており、周溝の底から旧表土上面までは約90cmを測る。盛り土は旧表土ブロック・地山ブロックの混じった互層となっているが、既に相当の盛土が流出しており、残存しているのは旧表土からわずか50cm程に過ぎない。

葺石や埴輪などの外表施設は認められなかった。また、表土除去中に周溝北東部埋土中から鉄鎌（第5図）及び須恵器軸蓋の小破片が出土した。これらは削平しないまま流出によって墳頂部の埋葬施設から転落したものと考えられ、このことからも埋葬主体の残存状態がかなり悪いことが予想された。

埋葬主体

前述のごとく埋葬主体の残存状況がかなり悪い事が予想されていたが、墳頂部の掘り下げを開始した直後に、墳丘の頂部中央の表土直下の非常に浅い位置から鉄鎌がまとまって出土した（第4図）。ちょうどこの鉄鎌の集中していた中央部分に地形測量のための基準ゲイが打ち込まれていたため、鉄鎌は二群に別れるような形で若干レベルも不揃いな状態で出土しているが、本来はひとまとまりで埋葬主体に伴う副葬品であったと考えられる。また周間に何らの石材も認められないことから、本古墳の埋葬主体は木棺直葬であったことが理解される。さらにその鉄鎌の真下15cmのところで鉄剣が出土した。この剣は切先を西に向けており、刃の部分は3つに折れ、柄の部分はバラバラになっていたがいずれもほぼ同一レベルで出土した（第4図）。これらの遺物はいずれも埋葬主体の床面に置かれていた可能性が考えられたため、それぞれの同一レベルにおいて盛土の精査をおこなったが、床面であると判断できず、また他には遺物は皆無であった。

この出土状況をどう判断するかであるが、鉄鎌の出土したレベルと鉄剣の出土したレベルをそれぞれ埋葬主体の床面と考えるならば重なって2つの埋葬主体が存在した事になる。あるいは鉄剣の出土レベルを床面と考え、鉄鎌は棺上に置かれたと考えることも可能であろう。この場合は埋葬主体は1つということになる。現状ではいずれか決定し難いが、2つの埋葬主体が存在する可能性は全くないとは言い切れないものの、ここでは1つの埋葬主体ととらえ、鉄剣を棺内、鉄鎌を棺上としておく。なお第3図の墳丘断面図には鉄鎌と鉄剣の両方の出土レベルを示している。



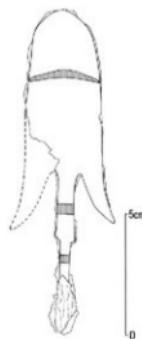
第4図 遺物出土状態 平・立面図
(S=1:10)

出土遺物（第5・6図）

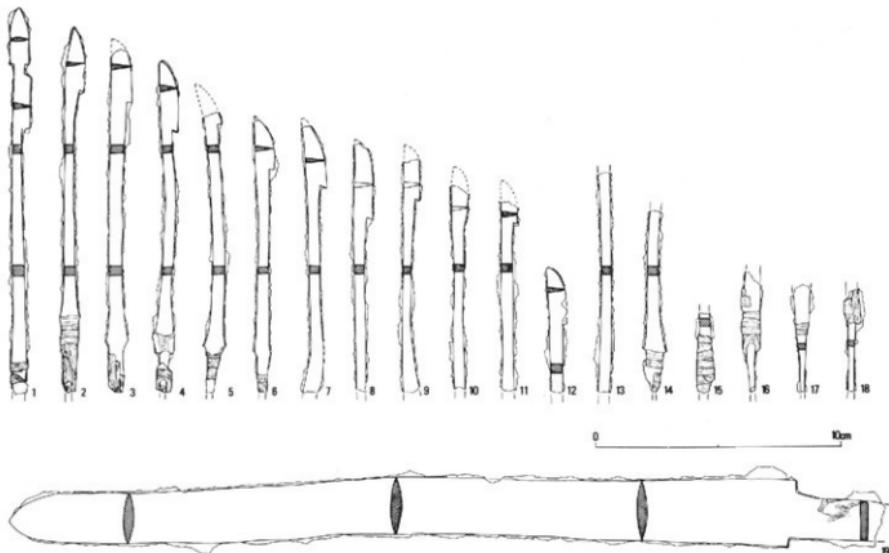
前述のごとく、周溝埋土から鉄鎌及び須恵器杯小破片が、埴丘からは鉄鎌及び鉄剣が出土している。それぞれの遺物について説明を加える。

第5図は周溝から出土した鉄鎌である。有茎平根式の鉄鎌であり、鎌身部の形態は鶴鉗柳葉式のものである（註1）。茎の部分に木質が付着している。鎌身の断面が湾曲しているが、本来は平らだったようである。また、周溝からは須恵器蓋杯の小破片が出土しているが、図示し得ない。これは本来は主体部に伴っていたものが周溝に流出したものと推定される。その特徴を記しておくと、蓋の天井部と口縁部の境の種線はシャープであり、杯身の口縁端部は面を持つものである。

第6図は埴丘から出土した遺物である。1～18は鉄鎌であり、19は鉄剣である。鉄鎌は鎌身の部分が12個体あることから少なくとも12本以上存在していることが理解され、そのすべてが長茎式である。また、鎌身部の形態は1が有片逆刺式である他はすべて片刃箭式である。1～6及び14～18には木質が遺存している。18の鉄剣は残存長36cmのものである。図面ではやや蛇行しているように見えるが、これは測量グイを打ち込んだときに歪んだものと思われる。



第5図 2号埴出土遺物(1)
(S=1:2)



第6図 2号埴出土遺物(2) (S=1:2)

b. 3号墳（第3図）

墳丘

3号墳は調査着手前には径約8m、高さ1m程度で、墳丘のあちこちに後世の客土と思われる土が存在し、平面は不整形を呈していた。特に2号墳と接する北西側には作り出し状の突出が存在したがこれも後世の客土である。周溝状の窪みはまったく認められなかった。また、2号墳と同様に、墳丘自体にかなりの削平あるいは上砂の流出があったことが認められた。

表土除去後は径約7m、高さ約1mの円墳となった。周溝は認められなかった。墳丘端から2号墳の周溝までの距離はわずかに1m足らずである。墳丘は平らな地山上に作られており、基本的にすべて盛土で作られている。盛り土は2号墳のように互層とはなっておらず、同質の土を盛り、その間に目表土・ブロックの層が存在しているに過ぎない。葺石や埴輪などの外表施設は認められなかった。また、表土除去中の出土遺物は皆無である。

埋葬主体

2号墳同様、埋葬主体の残存状況がかなり悪い事が予想されたため、墳丘の頂部中央の表土直下から精査を行ったが、埋葬主体は認められなかった。出土遺物も皆無である。墳丘の断ち割り時にも断面観察を行ったが、やはり埋葬主体の痕跡は認められなかった。盛土は均一で盜掘を受けた形跡も認められないため、埋葬主体は削平ないし流出したと考えられる。

6まとめ

本古墳群については残念ながら主体部を確認することはできなかった。しかしながら2号墳出土の鉄劍が原位置を保っていたとするならば、埋葬主体は木棺直葬であり、劍の切先を西に向いていることから埋葬頭位は東と推定できよう。3号墳については遺物が皆無のため、不明というほかはない。

次に出土遺物はまとまっているのは2号墳から出土した鉄鎌・鉄劍のみであるが、これらの遺物から2号墳の作られた時期を考えてみることにする。鉄鎌に注目するならば、長頭片刃箭式の縦身関部は直角からやや銳角となっているものが大多数を占めている。この特徴は尾上元規によればⅠ期に属するものであり、5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる（註2）。また、恐らく主体部に伴っていたであろうと推定される須恵器の杯蓋の小片は、稜のシャープさや口縁端部の形状から6世紀初頭以前の年代観が考えられ、鉄鎌によって導き出された年代観がおおむね妥当であると思われる。また、墳壇を2号墳と接するように作られている3号墳についても、ほぼ同時期のものと推定して差し支えないと考える。5世紀末から6世紀初頭の時期は美作においては木棺直葬を主体とする古墳群が相次いで作られ始めた時期であり（註3）、またその埋葬主体の頭位は東方向に統一されることが指摘されている（註4）。本古墳群もまさにこの地域において爆発的に増加し始めた古墳群の中の一例であると位置づけることができる。

（平岡正宏）

（註1） 以下の鉄鎌の分類については次の文献による。

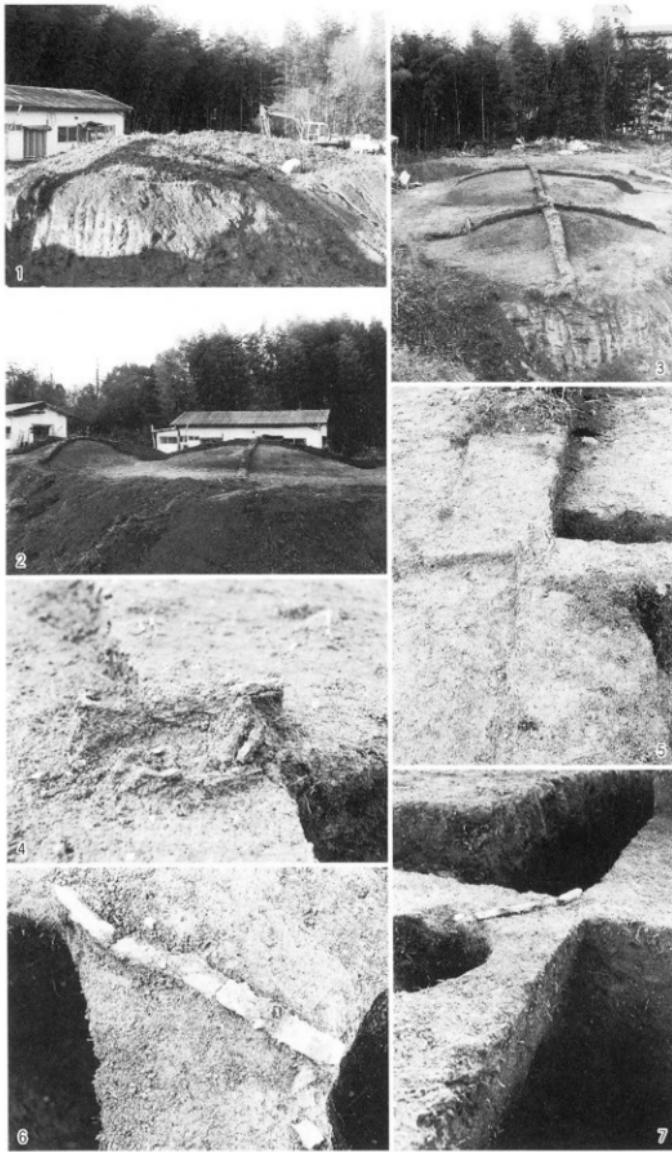
尾上元規「古墳時代鉄鎌の地域性—長頭式鉄鎌出現以降の西日本を中心として—」『考古学研究第40巻第1号』1993年

（註2） 計1文献

（註3） 安川豊史「古墳時代における美作の特質」「古墳の考古学的研究（下）」山陽新聞社 1992年

（註4） 行田裕美「小原遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第38集」津市教育委員会 1991年

図版 1



1. 調査前全景

5. 2号墳鐵鎌出土状況

2. 表土除去後全景

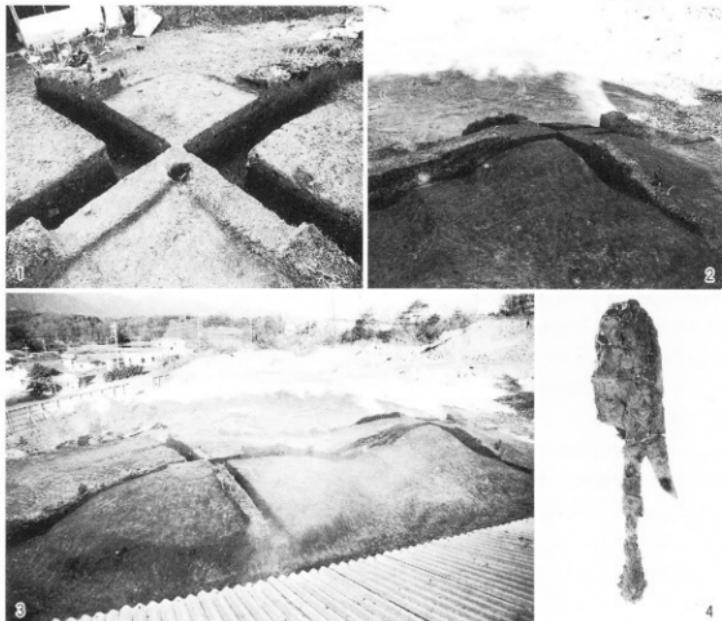
6. 2号墳鐵劍出土状況

3. 同左

7. 同左

4. 2号墳鐵鎌出土状況

図版 2



5

1. 2号墳中心部完掘状況
4. 2号墳出土遺物(1)

2. 3号墳完掘状況
5. 2号墳出土遺物(2)

3. 調査後全景

天神原遺跡・天満神社1号墳の調査

1. 調査にいたる経過

平成8年5月28日、医療法人蘭和会布上内科医院理事長布上直和より、津山市河辺347-18他10筆に建設予定の老人保健施設に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する協議がなされた。

津山市教育委員会としては、この地には周知の遺跡である天満神社1号墳が所在することから、工事に先立ち、事前に発掘調査を実施しなければならない。さらに、この場所は弥生時代の集落遺跡である天神原遺跡の範囲にも該当することから、古墳以外にも下層の集落の調査も必要であることを説明し、協力をお願いした結果、快諾をいただき発掘調査を実施することで合意した。

尚、発掘調査にかかる経費は全部原因者の負担によるものである。



第1図 位置図 (S=1:25,000)

2. 調査の経過

【確認調査】

確認調査は5月31日に実施した。前述のように、古墳以外に弥生時代の遺構の遺存状況を把握するためである。バックホーを借りり上げ幅2mのトレンチを設定して調査を行った。

この結果、古墳の周辺は道路、宅地、畑でかなり削平され、古墳築造前の旧表土面よりもかなり低くなってしまっており、古墳の範囲以外に遺構はあまり抜がらないことが判明した。

【本調査】

発掘調査に先立ち、古墳墳丘及び周辺の立木の伐採、草刈りを6月12・13日の2日間行った。調査面積は約230m²である。

以下、主な経過は次のとおりである。



第2図 天満神社古墳群分布図 (S=1:2,500)
(番号は古墳の号数を表す)

6月14日 調査前埴丘地形測量
 6月18～27日 塩丘全面清掃
 7月2～16日 塩丘の盛土除去
 8月5～8日 柱穴群実測、全ての調査終了

6月17日 塩丘表土剥ぎ
 7月1日 表土除去後地形測量
 7月17日～8月2日 下層の柱穴群掘り下げ

【調査担当】行田裕美

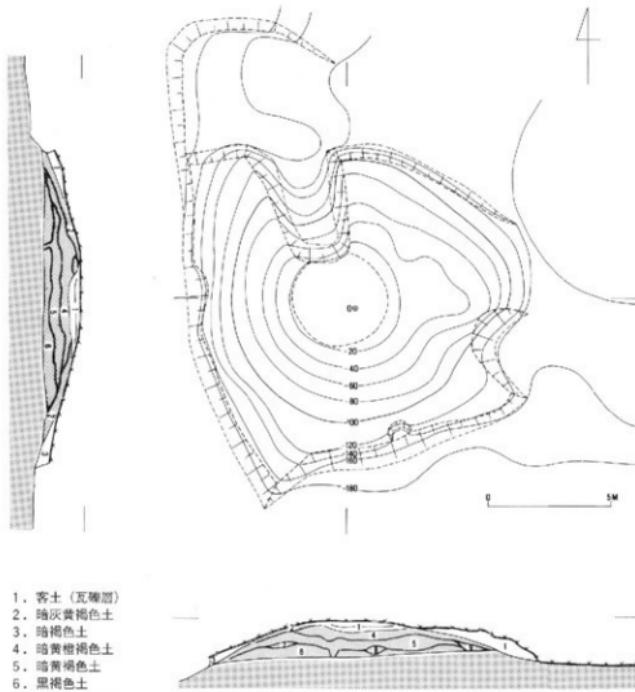
【調査補助】青木睦子、野上恭子、岩本えり子

【発掘作業】津山市シルバー人材センター

末沢賢次、末沢敏男、森 光規、竜門 卓、加藤文平

3. 天満神社1号墳の調査

天満神社古墳群は時期差はあるものの12基の古墳よりなる。このうち2～4号、9～12号の7基は中国縱貫自動車道の建設に伴い発掘調査され消滅している。残る5基のうちの6号墳と称されているものは全長30mの前方後円墳と考えられているが、大半が神社境内により失われており定かではない（註1）。今回、調査対象となった1号墳は古墳群中最も南に位置するものである。



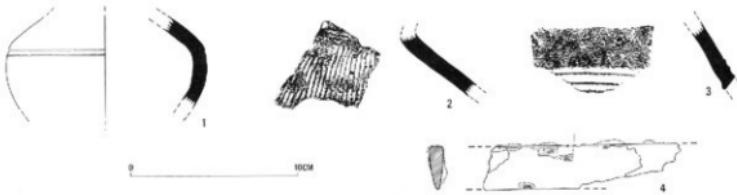
第3図 天満神社1号墳測量図・断面図 (S=1:200)

調査前の状況は埴輪付近が削平を受けている他に、北側において戦時中掘ったという幅3m、長さ5mの大きな凹みが認められた。頂部は平坦で目立った乱れもなく、中心主体部は盗掘を受けていないものと感じられた。ところが、掘り下げていくと埴輪断面図（第3図土層1）に示すように頂部は大きく掘られ、その上、丁寧にもその穴を瓦礫で埋めていたのである。盗掘穴の深さは現地表面から50cmの深さまで達していた。下層の調査もあるため、盛土を少しづつ除去し、主体部の検出に努めたが果たすことはできなかった。主体部は恐らく盗掘穴により失われたものと考えられる。

現況での計測値では径12m、高さ約2m（盛土の厚さ1.5m）の円墳である。盛土中より多量の脊生土器が出上した。これは染造時に天神原遺跡が眠る古墳周辺の土を盛土に用いた結果である。

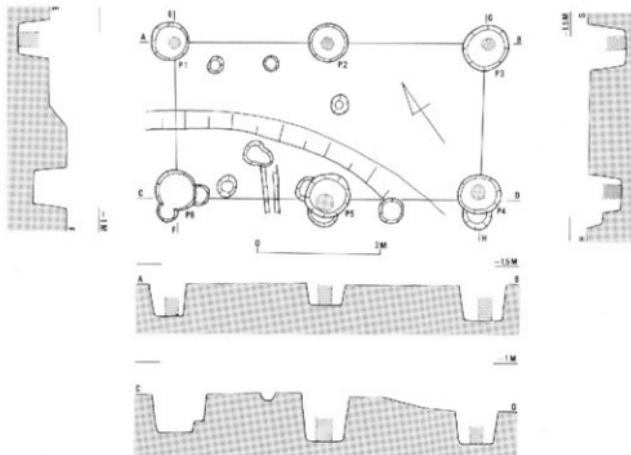
出土遺物（第4図）

古墳に關係する遺物はいずれも表土中からの出土であり、須恵器片数点と鉄刀片1点があるだけである。図示可能なものを掲載した。



第4図 天満神社1号墳の遺物（S=1:3）

1は瓶の肩部片である。2は甕の頸部片である。外面は平行叩き、内面はナデ仕上げである。3は器台の破片である。左右両端及び下端は方形透かし孔部に相当する。4は鉄刀片である。切先に近い部位である。部分的に鞘と考えられる木質が遺存している。

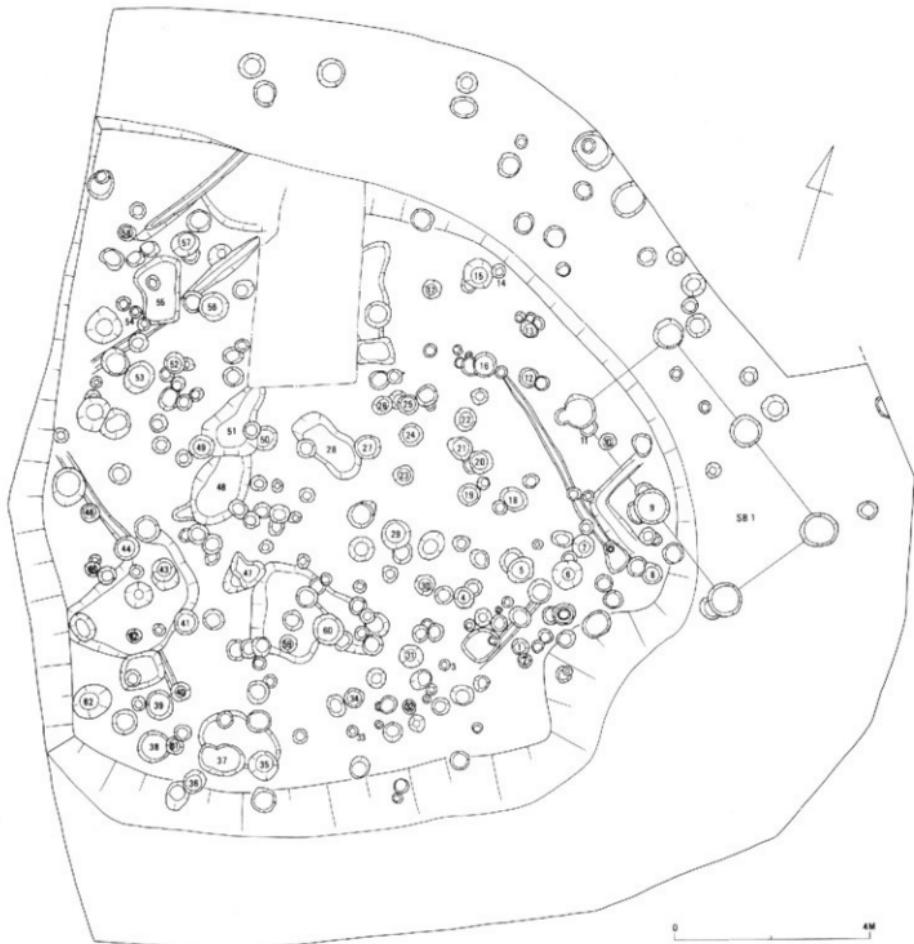


第5図 建物趾平面・断面図（S=1:80）

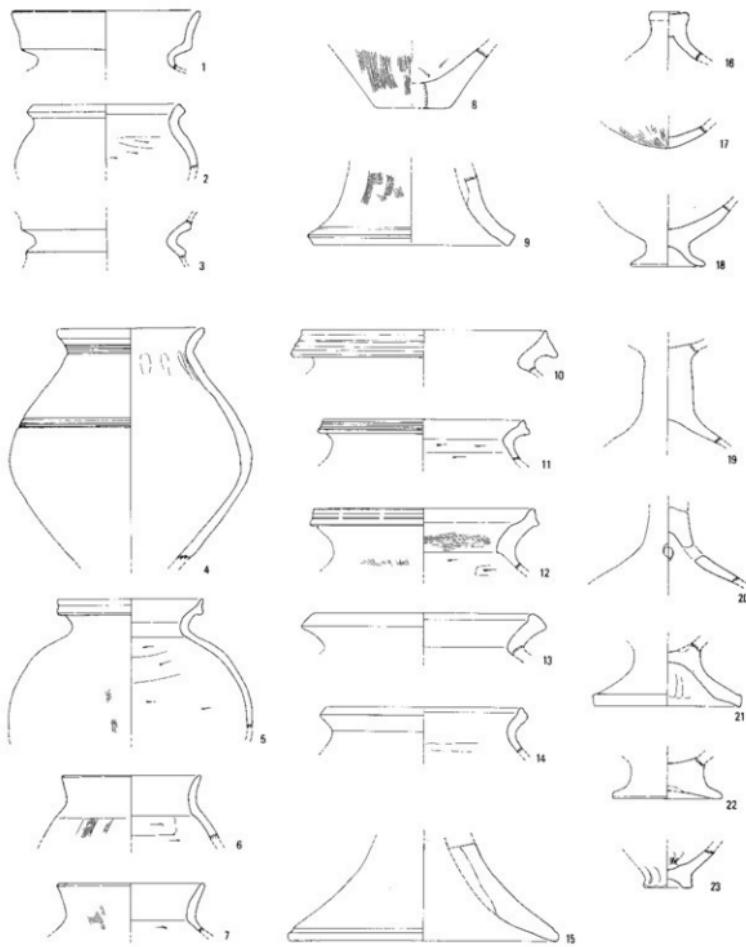
4. 下層（天神原遺跡）の調査

天神原遺跡は註1の発掘調査で、弥生時代後期後半の環濠集落であることが判明している。今回の調査地点はこの集落内に該当するものとの想定で実施した。

天満神社1号墳の盛土を除去すると、柱穴を中心とした多数の弥生時代の遺構が遺存していた。しかし、確実に遺構として認識できたのは建物址1棟だけである。他に、住居の壁体溝、中央穴に接続する床溝と考えられる溝もあることから、住居址群が切り合っている可能性が大であるが、識別することは



第6図 天神原遺跡平面図 ($S=1:100$)



0 10 20
100M



第7図 天神原遺跡出土遺物 (1~23···S=1:4 24···S=1:2)

できなかった。遺構としては柱穴、土壙等あわせて全体で264個を検出した。このうちの62個より弥生土器片が出土した。P-37出土の土器が前期であるほかは、いずれも後期のものである。

建物址（第5図）

桁行2間、梁間1間の建物である。P-6を除き、柱痕跡が確認された。桁行P-1からP-3の心々距離は5m、P-4からP-6は4.9m、梁間は共に2.4mを測る。柱穴の底面のレベルはP-2がやや高いほかは全て同レベルである。P-5より弥生土器片が出土したが、小片であるため時期を特定できるものではない。

出土遺物（第7図）

古墳の盛土、柱穴等から出土したもので比較的のわかるものを掲載した。いずれも破片である。1は二重II縁、2は口縁端面が拡張しないタイプの、13・14は端面の上端が内側にやや肥厚するタイプの、6・7はII縁が直行するタイプの壺形土器である。3はくびれ部しか残っていないが鼓形器台である。4は前期の壺形土器である。頸部と肩部にそれぞれ3条ずつの沈線をめぐらしている。5は壺形土器である。II縁部端面はナデ仕上げである。8は平底、17は丸底の甕の底部である。17の外間にススが付着している。9・15は器台の脚部である。10～12は口縁端面に退化した凹線をもつ壺形土器である。16は蓋、18・21・22は台付鉢である。19・20は高杯である。23は鉢形土器、あるいは蓋の可能性も考えられる。

24は器台形土器のII縁部である。端面に線刻が見られる。遺存状態が悪く、定かではないが人面を表現したようにも見られる。P-1から出土した。

1～3、8・9、16～18は盛土から出土した。4はP-37、5はP-15、6はP-28、7・14・15はP-35、10はP-59、11はP-4、12はP-61、13はP-53、19はP-36、20はP-34、21はP-34、22はP-3、23はP-57から出土した。

5.まとめ

今回の調査で弥生時代後期後半の環濠集落である天神原遺跡は従前の調査区よりも確実に南に広がることが判明し、より広大なものであることが確認された。さらに、前期の土器が出土したことから、遺構の密度は低いながらも同様の広がりが指摘できよう。

天満神社1号墳は確実に古墳に伴う遺物がないことから時期の推定は難しいが、表土中より出土した須恵器から5世紀末から6世紀初頭頃と考えられる。そして、埋葬主体には石材が1点も見当たらないことから、木棺直葬の様式が採用されていたものと考えられる。

（行田裕美）

(注1) 河本 清・橋本聰司・柳瀬裕彦・下澤公明「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』岡山県教育委員会 1975

図版 1



調査前



表土除去後



盛土除去後

図版 2



盛土断面



弥生全景



建物址

図版 3



確認調査



前期弥生土器



線刻土器

河辺小学校裏古墳群発掘調査報告

1 遺跡の位置と立地（第1図、第2図）

河辺小学校裏古墳群は岡山県津山市国分寺501番地他に所在する。古墳群は標高178.6mを測る觀音山から南西へ派生した丘陵の端部に存在する。その標高は約115m～125mであり、沖積地からの比高差は最大約25mである。今回の調査で本古墳群の構成数は7基となつたが、今回調査を行ったものは最も南側に存在する6・7号墳である。なお、以前に学校拡張工事に伴い1号墳の南側の確認調査を行っており、さらに神社境内造成により3号墳が一部削られ、その部分から須恵器・土師器が若干出土しているので、それについても併せて今回報告する。



第1図 位置図 (S=1:25,000)

2 調査の経過

平成9年2月18日付けで、津山市土地開発公社理事長中尾嘉伸より津山市国分寺510番地他において津山市立河辺小学校敷地拡張に伴う造成工事を行うため、文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘通知が提出された。工事対象面積は1,036m²である。当該敷地内には古墳残骸と思われるものが2基存在し、それらは河辺小学校裏古墳群を構成するものである可能性が高いため、津山市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。そこで平成9年3月4日付けで文化庁官宛に文化財保護法第98条の2第1項の規定により、埋蔵文化財発掘調査の報告を提出



第2図 古墳群分布図 (S=1:5,000)



第3図 調査前地形測量図 ($S = 1 : 200$)

し、平成9年3月5日から平成9年3月31日まで発掘調査を実施した。調査面積は約250m²である。その結果当該敷地内に古墳2基が存在することが明らかとなり、西側のものを6号墳、東側のものを7号墳とした。発掘調査は津市教育委員会・津山弥生の里文化財センター主査行田裕美・同主事平岡正宏が担当し、発掘作業には計津山市シルバー人材センターにお世話になり、下記の方々にご協力を得た。記して感謝致します。

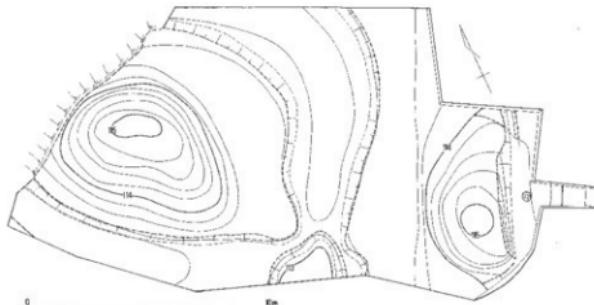
(発掘作業員) 稲垣光男、稻垣裕史、梶岡辰男、末沢敏男、森二三夫、山下加海

3 調査の記録

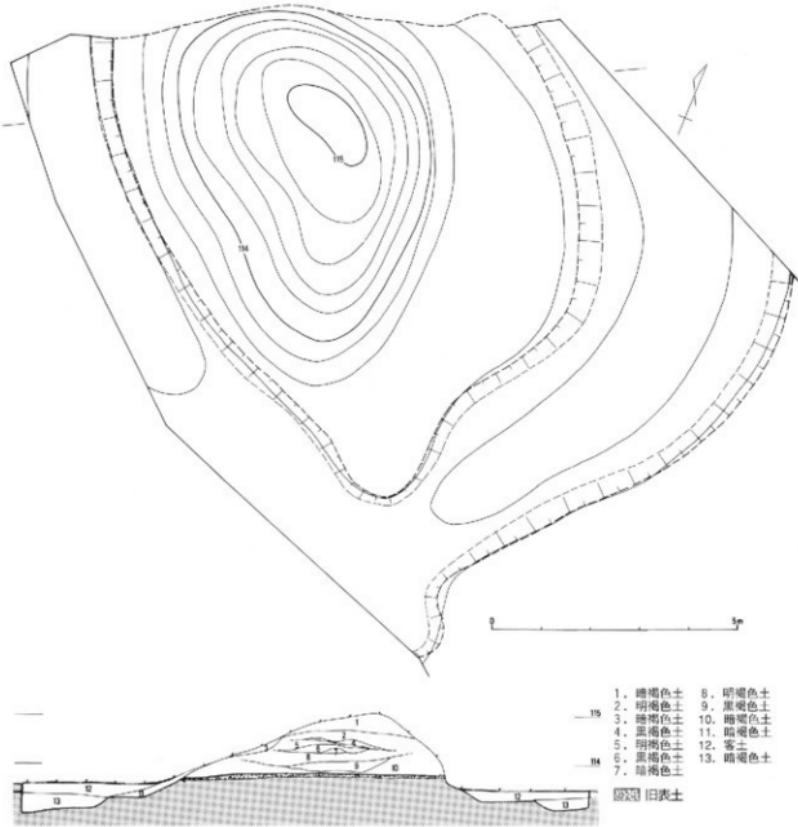
a. 6号墳の調査

墳丘(第5図)

6号墳は調査着手前に見かけ上長径約8m、短径約6m、高さ1.6m程の不整形円形状を呈していた。



第4図 調査後地形測量図 ($S = 1 : 200$)



第5図 6号墳墳丘 平・断面図 ($S = 1 : 100$)

恐らく古墳の周囲が削り取られた結果、中心部分のみが残存しているのであろうと推定された。また墳丘の北西側は後世の溝のために削り取られており、遺存していない。また6号墳と7号との間は後世に削平されており平坦な状況を呈していた。そのため、現状では墳丘の規模、周溝の有無などを推定することは不可能であった。

表土除去後に墳丘の周囲に最大幅3m程度の周溝が存在することが明らかになった。この周溝を掘り下げた結果、墳丘は長径約10m、短径約8mの円丘に幅2m長さ1.5m程度の張り出し部分がつき、造り出し付きの円墳となることが明らかとなった。周溝の深さは現状では30cm程度であるが、周溝床面からは破碎されて粉々の細片となった須恵器2個体分が出土した(第6図)。また、周溝内床面からやや浮いた状態で瓦や古代以降の土器破片が出土している。これらについては後述するが、一部前述の須恵器破片と混じり合うような状態であり、瓦はその総てが2次的に火を受けて焼けた状態で出土した。

墳丘は周溝床面から80cm上に旧表上面が存在しており、墳丘盛り土は約90cmの高さ残存しており、旧表土ブロック・地山ブロックの混じった瓦層となっている。既に墳丘の周辺分が相当程度削平されていることもあってか、葺石や埴輪などの外表施設は認められなかった。墳丘表土除去中には土師器の細片がわずかに出土しているが、図示し得ない。墳頂部には平坦面が殆ど存在しておらず、埋葬主体の残存状態はかなり悪いことが予想された。

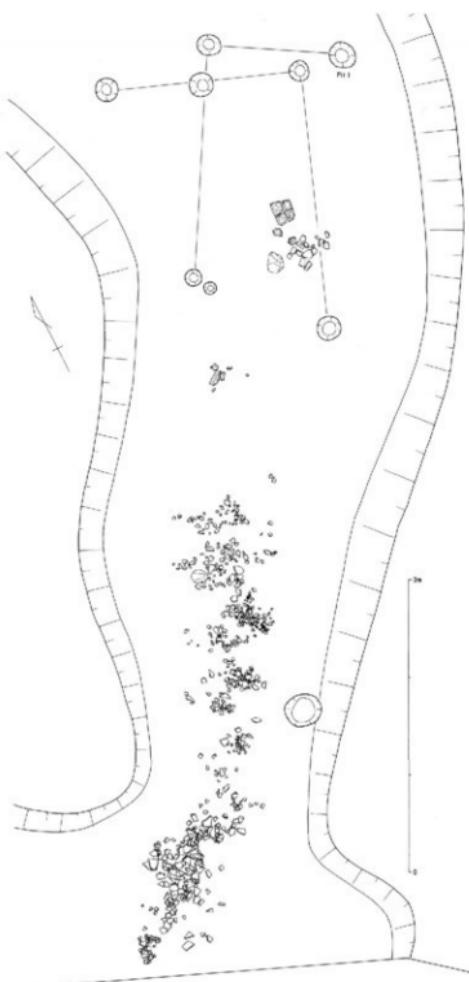
埋葬主体

埋葬主体の残存状況がかなり悪い事が予想されるなか、墳頂部の掘り下げを行ったが、埋葬主体を発見することはできなかった。そのため墳丘の断ち割りを行い埋葬主体の発見に努めたが、残存墳丘内には埋葬主体は存在しなかった。

出土遺物（第7図）

遺物は周溝内で出土した甕2点のみである。説明を加える。

1・2ともに須恵器大甕である。1は口径27.4cm、器高・胴部最大径は不明である。頭部は横ナデで無文であり、口縁端部は丸く仕上げられている。口縁部直下に一条の凸帯が巡るが、断面観察によると一度この凸帯の部分で口縁が形成され、その上にもう一段粘土を積み上げて口縁端部を仕上げている。すなわちこの凸帯は最初に形成された口縁部の端部なのである。胴部内外面はナデ仕上げである。2は口径40.0cm、器高82.2cmで胴部の最大径69.2cmを測る。頭部に2条の櫛描き波状文と3条の沈線を巡らせる。胴部は外面が格子目叩き、内面には同心円の当て具痕が残る。これらの所属時期は1がTK 208、2がTK 23～TK 47の時期に相当すると思われる（註1）。



第6図 6号墳周溝内須恵器出土状況 (S = 1 : 50)

b. 7号墳の調査

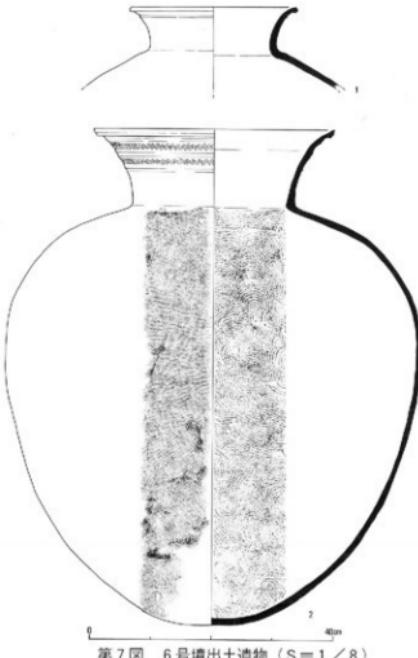
墳丘（第8図）

7号墳は調査着手前には殆ど墳丘の体をなしておらず、北東側の2m×5m程度の窪みがわずかに周溝の名残の可能性を示すに過ぎなかった。特に墳丘の西側から南側には後世の削平により段になっており周溝状の窪みはまったく認められなかった。この時点ではもし古墳ならば推定直径8m程度の規模が推定できる程度であった。

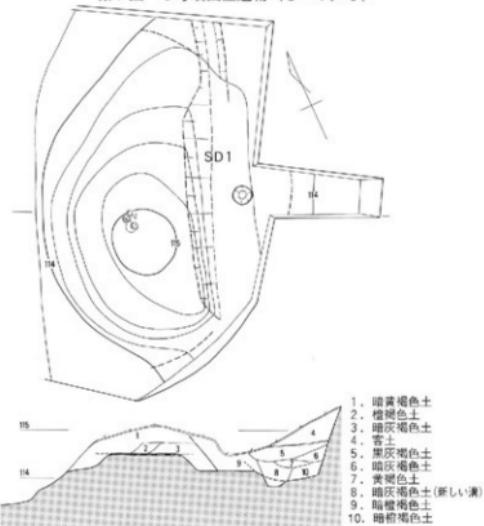
表土除去後は径約8m、高さ約1.5mの円墳の東半分が残存していることが明らかとなった。周溝は墳丘東側において、こちら側も後世の溝に削られているものの、わずかに周溝上の窪みが認められた。墳丘は凹凸のある地山の上に作られており、盛土は30cm～40cm残存しているのみである。葺石や埴輪などの外表施設は認められなかった。また、表土除去中に墳丘頂部で石製紡錘車が出土した。さらに6号墳同様、墳丘周囲から焼けた瓦が出土している。特に墳丘東側の後世に掘削された南北方向の溝（SD1）からは瓦が集中して出土しているが、これについては別に述べることにする。なお墳丘頂部で石製紡錘車（第10図9）が出土していることから、何らかの形で埋葬主体が残っている可能性を考えられた。

埋葬主体（第9図）

墳丘の頂部中央の表土直下から精査を行った所、須恵器・土師器がまとまって出土したため、埋葬主体は木棺直葬であろうと推定された。しかしながら墳丘盛土には竹の根が縦横無尽に張っており、竹の根の間に上がっているような有り様であり、埋葬主体を平面的に追求することができず、その規模等は不明と言わざるを得ない。敢えて推定するならば、この地域において



第7図 6号墳出土遺物（S=1/8）



第8図 7号墳墳丘 平・断面図（S=1:100）

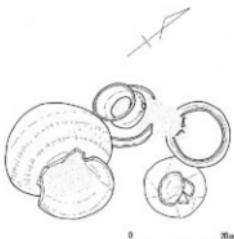
は木棺直葬の埋葬主体の方向はほぼ東西に主軸を取る例が大多数を占める事が知られている（註2）。本墳の例に当てはめると、埴丘の復元状況から主軸が東西方向の埋葬主体の東の端に前述の須恵器・土師器が位置している状況が推定される。

須恵器・土師器の配置状況は、第9図の通りであるが、杯は北側のものが天地逆に置いた杯蓋の上に正立した杯身が2段に乗っており、南側のものはやはり天地逆に置いた杯蓋の上に正立した杯身1点さらにはその上に扇が乗っている状況である。

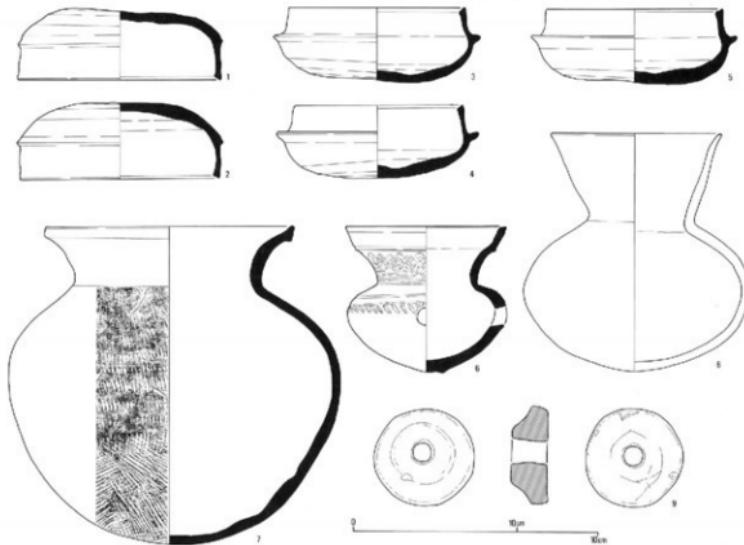
出土遺物（第10図）

遺物は前述の須恵器・土師器及び埴丘頂部で出土した紡錘車で、その内訳は須恵器杯蓋2点、杯身3点、壺1点、麻1点、土師器壺1点、紡錘車1点である。以下説明を加える。

1は杯蓋である。口径12.8cm器高4.5cmで、天井部は平たく、天井部と口縁部の境の稜は短く突出し、口縁端部には面を持つ。2も杯蓋である。口径12.6cm器高4.8cmで、天井部はやや丸みを持ち、天井部と口縁部の境の稜は短く突出し、口縁端部には面を持つ。3は杯身である。口径10.9cm、器高4.7cmで、底部は平らで口縁部はやや斜めに立ち上がり、端部内面には面を持つ。4も杯身である。口径10.5cm、器高4.6cmであり、底部はやや丸みを持ち、口縁部はやや斜めに立ち上がり、口縁端部の内面には面を持つ。5も杯身である。口径は11.0cm、器高は4.7cmであり、底部は平らであり、口縁はやや斜めに立ち上がり、端部の内面には面を持つ。6は須恵器壺である。口径



第9図 7号墳出土遺物
(S = 1 : 10)



第10図 7号墳出土遺物 (1~8 S = 1 : 10, 9 S = 1 : 2)

10.0cm、器高は9.1cmである。頸部にはカキ目の上に櫛描き波状文を施し、胴部上方に一条の沈線を施し、その下に櫛描き列点文を施している。7は須恵器壺である。口径15.6cm、器高19.9cmである。胴部上半は平行叩き目の上を横方向のナデ、下半は不定方向の平行叩き目である。内面は丁寧なナデ仕上げであり、当て具痕は認められない。8は土師器長颈壺である。口径10.8cm、器高14.8cmである。口縁は斜め外方に開き、端部はやや外反する。内外面ともに器壁がはがれており、調整は不明である。9は石製紡錘車である。直径4.1cm、厚さは1.5cmである。

これらの遺物の所属時期は、須恵器の編年から（註3）TK 23～TK 47型式に相当し、5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる。

c. SD 1の調査（第8図）

前項で述べたとおり、7号墳の埴丘東側を東西方向に削ってSD 1が存在する。溝の規模は上部幅約1m、底部で約30cm、確認できた長さは約6.5mである。この溝から瓦等の遺物がコンテナ2箱程度出土した。これらはいずれも2次的に火を受けている。以下、主なものについて解説する（第11図）。

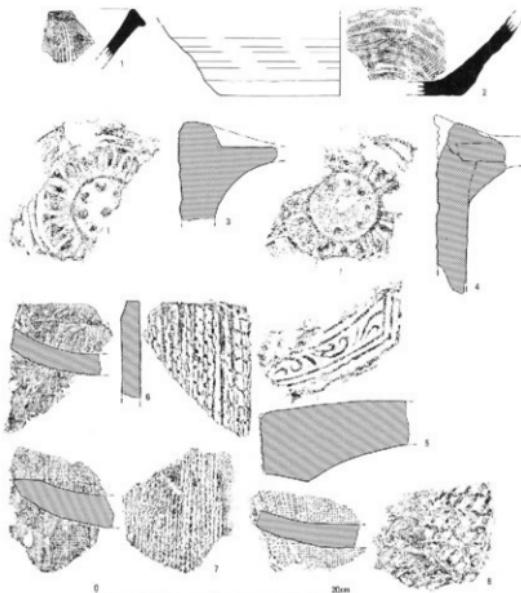
1は備前焼の摺鉢である。細片で口径等は明らかではないが、Ⅲ期末からⅣ期初頭頃のものと思われる（註4）。2は勝間田焼甕の底部である。外面はナデ、内面はナデの上にハケ目を施す。1

の備前焼と同時期のものであ

ろうか。3・4は軒丸瓦である。共に摩滅が著しいが、美作国分寺分類のI-b型式のものである（註5）。5は軒平瓦である。美作国分寺分類のI-b型式のものである。6～8は平瓦である。すべて凹面は布目、凸面は6が細い格子目、7が繩目、8が格子目の叩き目である。

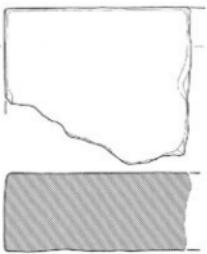
d. その他の遺構・遺物（第12～13図）

古墳に伴わない遺構として6号墳周溝内の9個の柱穴がある。これらのうち北側に存在する7個の柱穴は重なり合う2棟（1間×1間と1間×2間）の建物を構成する可能性がある（第6図）。またPit 1からは壇が出土している（第12図）。これは壇の角の部分で、全体の大きさは不明だが、厚さは6.4cmであ



第11図 SD 1出土遺物（S=1:4）

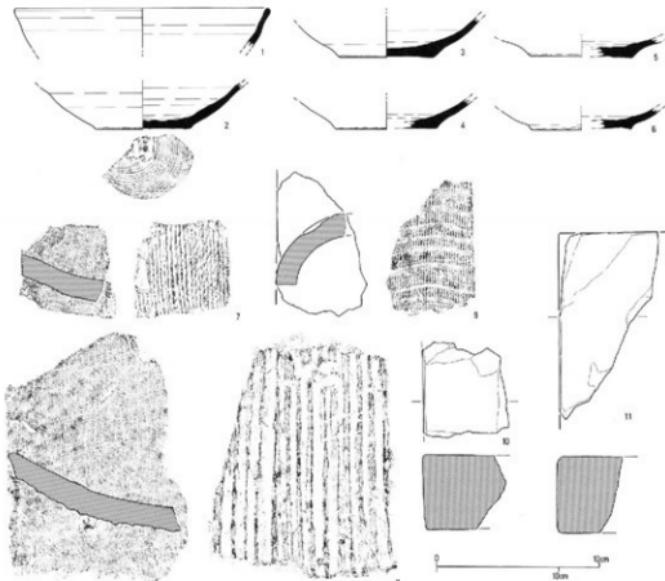
る。美作国分寺出土品の分類によるA群と呼ばれるものである(註6)。これらの柱穴の時期は古代に属するものと考えられる。さらに前述のように、6号墳周溝埋土中からコンテナ2箱分程度の遺物が出土している。その殆どは瓦である(第13図)。以下、説明する。1~6は須恵器碗である。いわゆる勝間田焼で、口径12cm程度、底径6cm程度のものでその器形から12世紀後半のものと思われる(註7)。7~8は平瓦である。共に凹面は布目で、凸面は7が繩目叩き、8が平行叩き目である。9は丸瓦である。凸面の調整は摩滅して不明であるが、凹面には布目の圧痕が残されている。10~11は埴である。破片のため全体の大きさは不明であるが、厚さは10が6.2cmで11が6.4cmである。これらも美作国分寺分類のA群である。



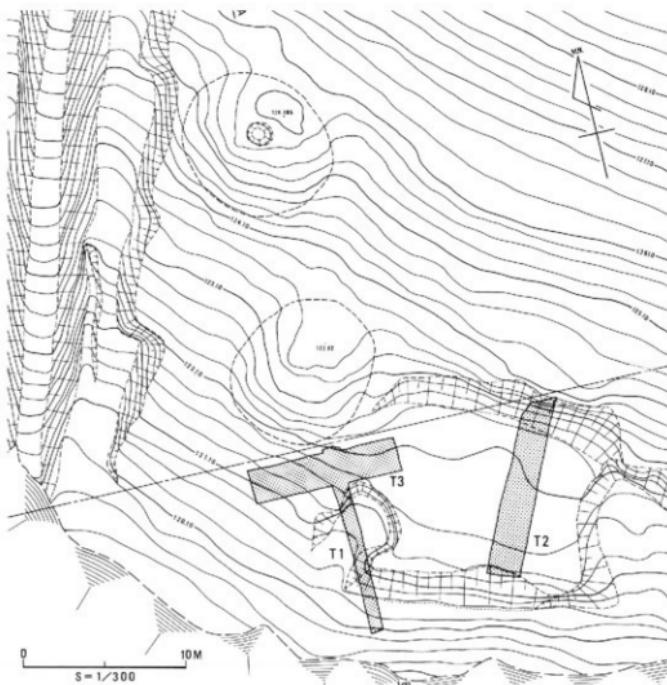
第12図 Pit 1出土遺物
(S = 1 : 4)

e. 河辺小学校拡張に伴う確認調査(第14図)

河辺小学校拡張に伴い昭和53年8月8日~15日にかけて、1号墳の南側について確認調査を行った。これは1号墳の南側、拡張予定地内に盗掘痕状の窪みが存在したため、この部分が古墳であるかないかを確認するためにT1・T3の2本のトレンチを設定して確認を行った。その結果はこの部分からは須恵器等小破片が若干出土したものの、古墳の痕跡は認められなかった。また、そのすぐ東側部分で約10m×15mの平坦な部分についてもトレンチT2を設定して確認を行ったが、遺構・遺物は認められなかった。



第13図 6号墳周溝出土遺物 (1~6 S = 1 : 4 7~11 S = 1 : 4)

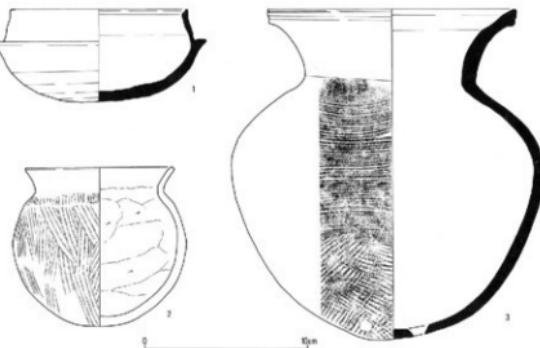


第14図 1・2号墳測量図およびトレンチ配置図 ($S = 1 : 300$)

f. 3号墳採集の遺物 (第15図)

本資料は平成2年12月24日に、津市国分寺259-8北奥三男さんと同233-50田潤久美子さんから「金古神社裏出土」の遺物として寄贈を受けたものである。現地で確認の結果、河辺小学校裏の3号墳の出土品であることが判明したので、報告する。遺物は須恵器杯身1点、壺1点、土師器壺1点の計3点である。

1は須恵器杯身である。口径11.1cm、器高5.7cmを測り、口縁



第15図 第3号墳出土遺物 ($S = 1 : 3$)

はやや斜めに立ち上がり、端部には段を持って沈線状を呈し、底面は丸みをもつ。2は土師器の小形壺である。口径9.2cm、高さ9.9cmを測る。口縁部外面は縱方向のハケ目、内面はヨコナデ、体部外面は縦から斜め方向のハケ目、内面は斜め上方向へのヘラ削りである。3は須恵器壺である。口径は15.5cm、器高20.7cmである。口縁部は内外面ともにナデ、体部外面上半はカキ目、下半は乱方向の平行叩き目である。内面は當て具痕をナデ消しているようである。底部に直徑7~8mm程の穴が焼成後に外側から開けられている。

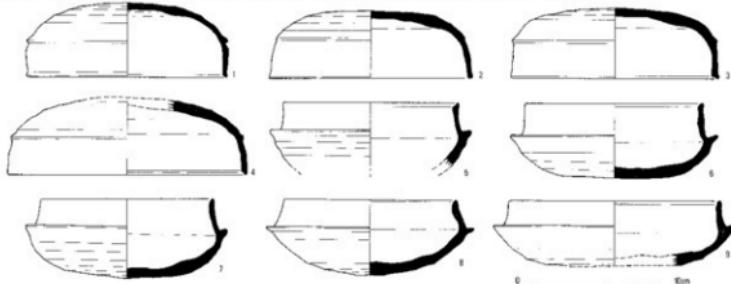
これらの土器の時期であるが、須恵器の特徴を陶色の編年（註8）に当てはめてみると、TK23形式に相当すると思われ、5世紀末頃の時期が与えられよう。

g. 河辺小学校建設時出土の遺物

本報告を作成中に、津山弥生の里文化財センターに収蔵している河辺公民館旧蔵の資料の中に、「国分寺裏小学校 昭和二十七年三月」あるいは「小学校裏 昭和二十七年三月」と墨書きされた須恵器が若干存在していることが明らかとなった。当時の記録が全く存在していないので詳細は定かではないが、現在の河辺小学校敷地内に古墳が存在していて、そこから出土したものと思われる。これらの古墳も河辺小学校古墳群に含まれるため、ここでその遺物の概要を述べる。

遺物は須恵器杯が9点である。その内訳は杯蓋4点、杯身5点である。1は杯身で口径12.6cm、高さ4.7cmで天井部は丸く、天井部と口縁部の境の稜はやや突出しており口縁端部はわずかに面を持つ。2は口径12.8cm、器高4.2cmで、稜は純く殆ど認められず、口縁端部の面もはっきりしない。3は口径13.1cm、器高4.5cmで、口縁端部にははっきりとした面を持つ。4は破片であり口縁はやや不安もあるが他の物よりは明らかに大きい個体で、口径は15.0cm、器高約4.7cmを測る。稜は短く低く、口縁端部内面には浅い沈線が巡る。5は杯身である。口径は11.0cm、破片のため器高は明らかではないが、口径に比して器高がやや高いようである。口縁は垂直に近く立ち上がり、端部には面を持つ。6は口径11.2cm、高さ4.7cmで、口縁は長く垂直に立ち上がり、端部に面を持つ。7は口径10.8cm、器高5.0cmで口縁はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸く收める。8は口径10.8cm、器高4.7cmで口縁は斜めに立ち上がり端部は丸く收める。9は破片であるが、他の物よりも明らかに大きい個体で、口径13.2cm、器高約4.0cmである。口縁はほぼ垂直に立ち上がり端部内面に細い沈線が巡る。

これらの遺物の特徴としては、①口縁のやや大きいものを含む②口縁端部に明瞭な面を持たないか丸く仕上げる個体があること、があげられる。これは3・6・7号墳出土須恵器と比較してやや新相を示している。陶色編年のMT15型式に相当し、6世紀前半の年代が与えられる（註9）。



第16図 河辺小学校建設時出土遺物 (S = 1 : 3)

4.まとめ

以上、河辺小学校裏古墳群の調査及び採集品について報告を行った。現状での事実の確認、また若干の問題点の提起を行ってまとめとする。

a. 古墳群について

6号墳は径10m程度の造り出し付きの円墳であった。埋葬主体は遺存していなかったが、周溝からT K 208及びT K 23~47段階の須恵器大甕が1個ずつ出土している。これらの甕は意図的に破碎された状態で出土した。同様の例に長畠山北2号墳があり(註10)、共通の祭祀行為を行っていたことが理解される。T K 208段階すなわち6世紀後半の時期の須恵器を持つものの、6号墳が築造されたのは5世紀末ないし6世紀初頭と考えられる。

7号墳は径8m程度の円墳であった。墳頂部から須恵器がまとまって出土したものの、主体部の規模等を明らかとすることはできなかった。遺物の出土状況から木棺直葬と考えられる。出土須恵器から7号墳の築造時期もT K 23~47段階、すなわち5世紀末ないし6世紀初頭と考えられる。6号墳と7号墳の先後関係は明らかではない。

また、1~5号墳については未発掘であるが、3号墳から採集された土器類についても6・7号墳とほぼ同時期のものであることが明らかとなった。恐らくはこの河辺小学校裏古墳群も、同じく鶴音山から南へ派生する尾根上に位置する長畠山北古墳群、あるいは約1km西方に所在する日上畠山古墳群等と時期を同じくするものであろう。また、学校造成などで消滅したと思われる古墳の遺物に6世紀前半段階まで降る遺物が含まれる点についても、長畠山北古墳群での追跡の最終時期と一致するものである。

b. 古代以降に属する遺構・遺物について

古代以降の遺物については6号墳周溝内及びSD1から集中的に出土した。美作国分寺の創建軒丸・軒平瓦を含む瓦類が大半を占め、それらに混じるように古代末から中世の土器等が出土している。さらに瓦類はそのいずれもが2次的に火を受けていることが注意される。ちなみに美作国分寺寺城東限は6号墳の西10m程度の場所であることがこれまでの調査によって確認されている(註11)。またSD1は寺城の東限から東へ約30mの地点に位置している。

これらの出土遺物の示すところは①この場所に国分寺関連の施設が存在しており、それが火災に遭った②国分寺が火災に遭い、その後始末の折りに瓦類を寺域外のこの地点に捨てた、のいずれかと推定される。この場所が寺域外であることから、恐らくは後者であろうと思われる。 (平岡正宏)

(註1) 田辺昭二「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古クラブ1986年

田辺昭二「須恵器大甕」角川叢書 1981年

(註2) 行田裕美・小郷利幸・木村祐子「小原遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集」津山市教育委員会 1991年

(註3) (註1)

(註4) 関延忠彦『備前鏡』考古学ライブラリー60 ニューサイエンス社 1991年

(註5) 清水大・行田裕美・安川重史「美作国分寺跡発掘調査報告」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第5集」津山市教育委員会 1980年

(註6) (註5)

(註7) 平岡正宏「美作の古代末から中世の土器」「中近世土器の基礎研究Ⅱ」日本中世土器研究会 1993年

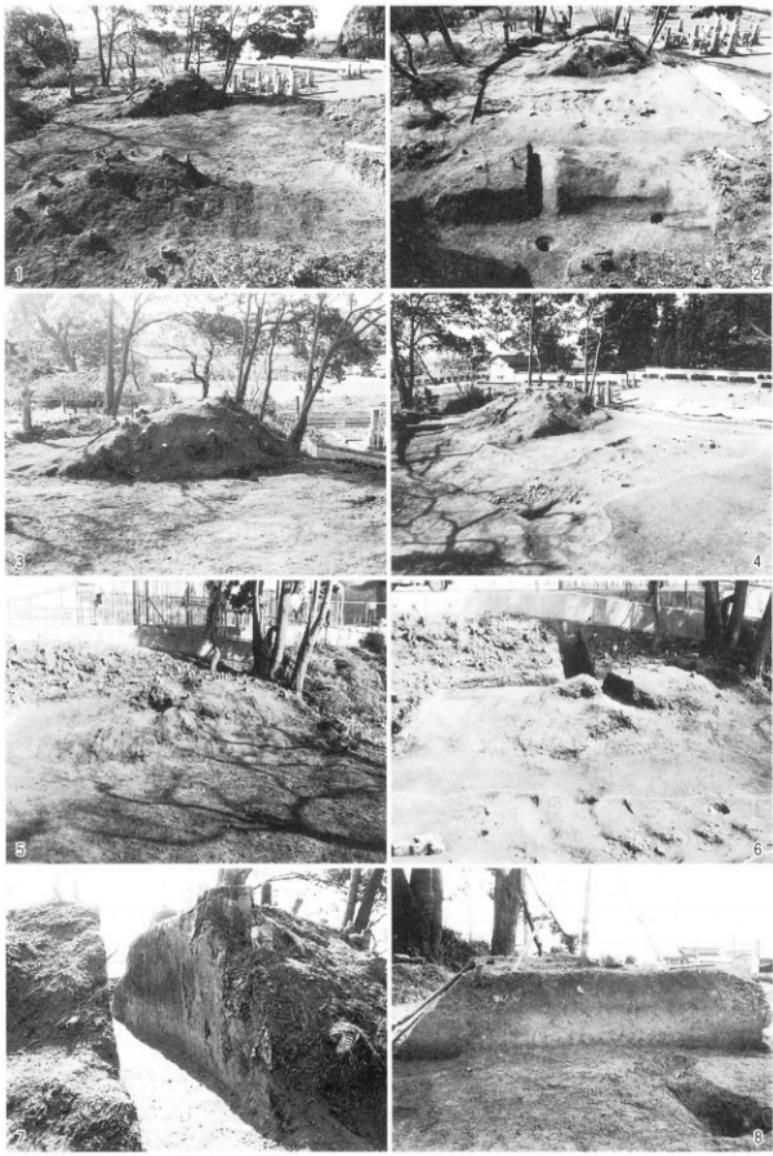
(註8) (註1)

(註9) (註1)

(註10) 行田裕美・保田義治・木村祐子「長畠山北古墳群」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集」津山市教育委員会 1992年

(註11) (註5)

図版 1



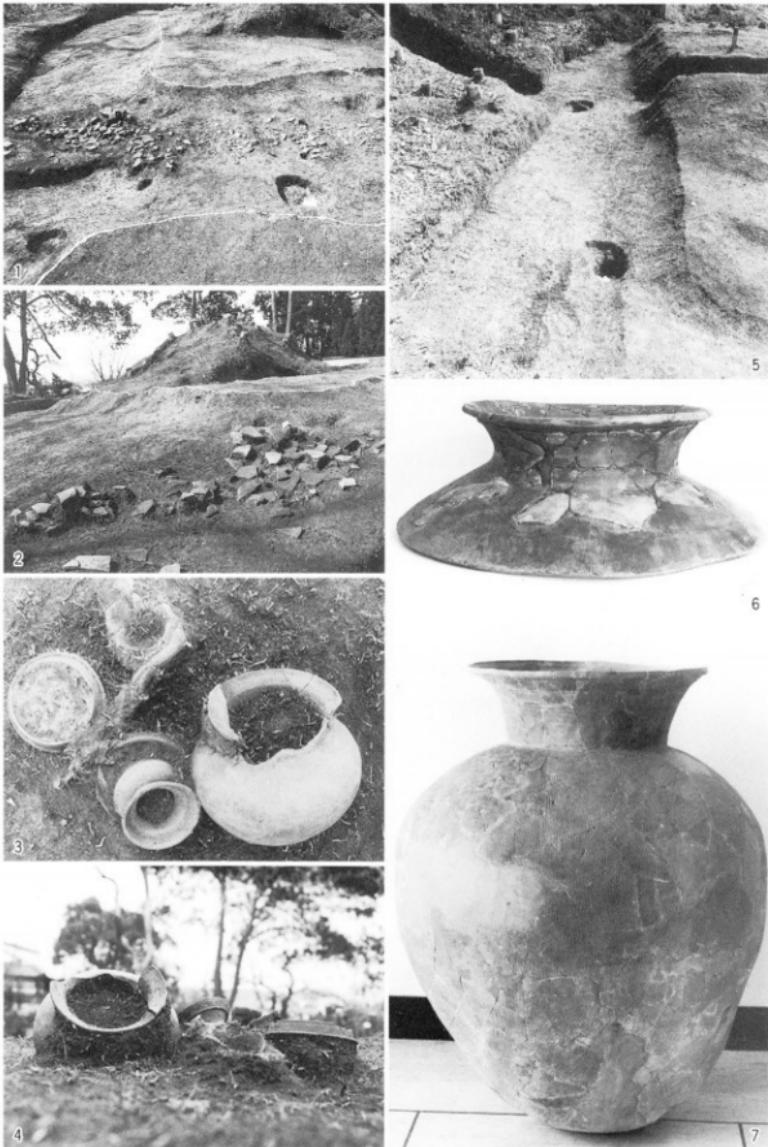
1. 表土除去後全景
5. 7号填表土除去後

2. 調査後全景
6. 7号填調査後

3. 6号填表土除去後
7. 6号填丘断面

4. 6号填調査後
8. 7号填丘断面

図版 2



1. 6号墳周溝須恵器出土状況 2. 同左
5. SD 1全景 6. 6号墳周溝出土須恵器(1) 3. 7号墳墳頂須恵器出土状況 4. 同左
7. 6号墳周溝出土須恵器(2)

図版 3



7号墳出土遺物



3号墳出土遺物

個人住宅建設に伴う美作国分寺跡確認調査

1. 調査にいたる経過

美作国分寺跡の想定寺域西端部において、個人住宅建設が計画された。この工事は現水田面に盛土をし住宅建設をするもので、地下の遺構に影響を及ぼすものではなかった。しかし、西端については従来の調査では把握できておらず、東端を伽藍中軸線で折り返しての想定に過ぎなかった。このことから、今回の工事にあたり西端を確認する

ための調査を実施したい意向を原因者に伝えた結果、協力が得られ確認調査を実施する運びとなった。

2. 調査の経過

確認調査は予定地に幅2m、長さ25mのトレーニングを設定し、10月23日から30日まで実施した。

10月23～25日 トレーニング設定、掘り下げ



第1図 位置図 ($S = 1 : 25,000$)



第2図 美作国分寺伽藍配置とトレーニング位置図 ($S = 1 : 2,000$)

10月28日 写真撮影

10月29日 平面・断面実測

10月30日 レベル移動、国土座標接続測量

発掘調査担当及び作業員は次のとおりである。

【調査担当】中山俊紀、行田裕美

【発掘作業】津山市シルバー人材センター

森三男、木沢敏男、山下加海、稻垣光男

稻垣裕史、梶尾嘉明

3. 調査概要

住宅建設予定地の水田に寺城西端の南北溝を把握するため、幅2m、長さ25mの東西方向のトレーニングを設定した。層序は20cm足らずの耕土及び床土の下は基本的には整地層である。整地層は黄褐色の地山層と黒褐色の表土層の互層で形成されている。トレーニングの中央部付近でこの整地層を掘り下げる結果、傾斜した自然層があらわれた。この場所は御藍中軸線での現水田面レベルと比較しても2m程低い位置に相当する。従って、国分寺建立以前の地形は東から西にかけてかなり傾斜していたことが伺える。

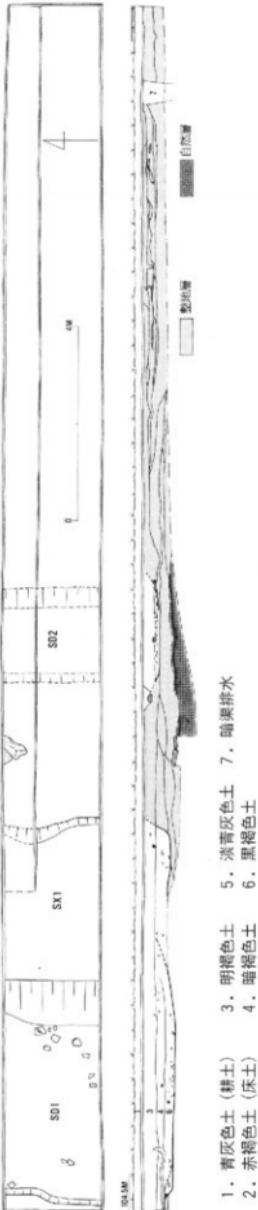
遺構としては溝(SD1, SD2)と不明遺構(SX1)を検出した。いずれも整地層内に形成されている。SD1は底面幅3.5mの南北溝である。底面のレベル付近までSX1に切られており、立ち上がり部が明確ではないが、残存部での深さは15cmを測る。SD1, SX1とともに下層を中心に多量の瓦を包含していた。SX1は性格不明の遺構である。しかし、国分寺期の遺物しか包含しないことから、国分寺関連の遺構でSD1より新しい時期のものであるということはできよう。

SD2は底面幅1.5m、深さ10cmの溝である。SD1, SX1同様下層を中心に多量の瓦を包含していた。やはり、国分寺期以外の遺物は包含されていない。SD1, SD2の距離は残存上端間で5m、削平を考慮すれば4mぐらいになろうか。

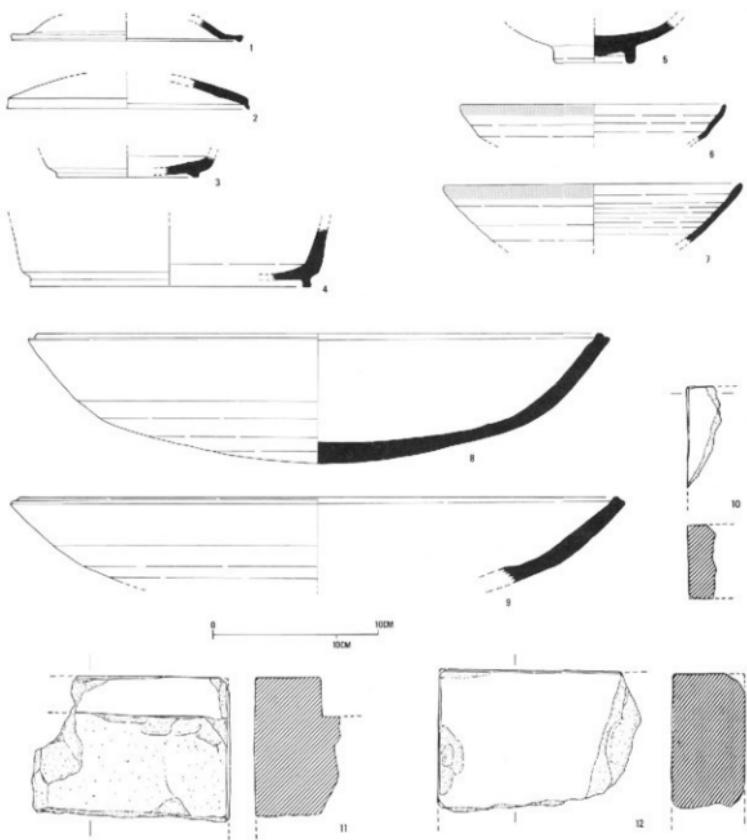
さて、これら遺構の評価であるが、SD1は御藍中軸線で寺城の東を画す溝を折り返した位置に相当することから、寺城の西を画す溝とすることができる。SD1とSD2の間の推定距離は約4mで幅がやや広いが、この間に築地状のものを想定すれば、SD2を雨落ち溝とすることもできなくもない。

4. 出土遺物

遺物は遺物収納用コンテナにして15箱分出土した。ほとんどが



第3図 トレーニング平面・断面図 ($S = 1 : 100$)

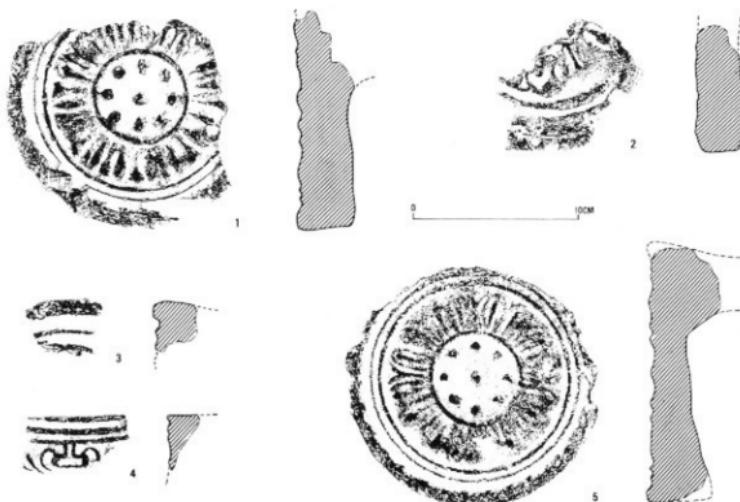


第4図 出土遺物(1) (1~9···S=1:3 10~12···S=1:4)

瓦で、土器類は若干量であった。上器類には弥生土器、須恵器、勝間田焼等がある。瓦は平瓦、丸瓦が主で、軒瓦、埠は図示したものがすべてである。

第4図1~4は須恵器である。1・2はつまみの付く杯蓋である。3・4は高台付き杯身である。これらはいずれも8世紀代の範疇でとらえられるものである。5は高台付き青磁碗である。6~9は勝間田焼である。6・7は椀、8・9は捏ね鉢である。13世紀の中でも後出のものであろうか。10~12は埠である。10・12は通常の方形のものであるが、11は断面図が示すように鉤形になっており、全形は定かではない。

第5図には軒瓦を掲載した。美作国分寺の型式分類(註1)に従うと、1は軒丸I-b、2は軒丸II-b、3は軒丸II-a、4は軒平I-bに対応する。5は調査中、木田より採集したものである。軒丸I-a型式のものである。



第5図 出土遺物(2) ($S = 1 : 3$)

5.まとめ

これまで美作国分寺の寺域東西幅は唯一、T-3-1で検出された南北溝を東を画する溝と想定し、伽藍中軸線で折り返した値の700尺と考えてきた。しかし、これはあくまで想定で確たる証拠はなかった。今回の調査で、従来の想定が正しかったことが証明された。

次に、築地の問題であるが、T-3-1の調査段階では南北溝の西側に柱穴が検出されたことから、東面築地の存在は否定的に考えられていた。しかし、今回の調査をみる限り、西面築地は想定してもよさそうである。

(行田裕美)

(註1) 渡哲夫 安田豈史 行田裕美『美作国分寺跡発掘調査報告』 津山市教育委員会 1980年

図版 1



トレンチ

図版 2



軒瓦

市道T110・T112号線道路改良工事に伴う 美作国分尼寺跡確認調査

1. 調査にいたる経過

平成8年4月19日、津山市建設部から市内国分寺の市道T110・T112号線の改良工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する協議がなされた。津山市教育委員会としては現状では周知の追跡の対象範囲には含まれていないが、美作国分尼寺跡推定地に隣接することから、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知の提出を求めるとともに、

工事着手前に埋蔵文化財の確認調査を実施することで合意した。



第1図 位置図 ($S = 1 : 25,000$)

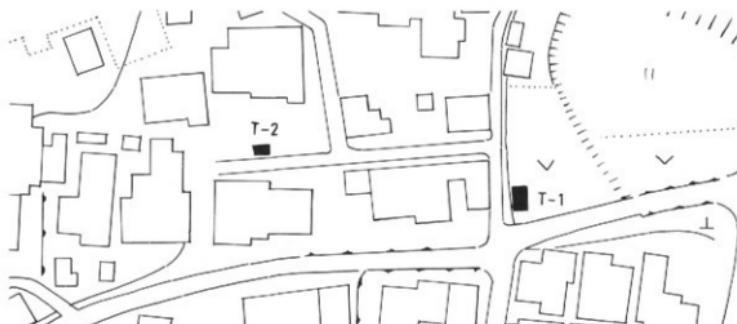
2. 調査の経過

確認調査はルート上に2ヶ所のトレンチを設定し、5月21日から23日までの3日間実施した。

- 5月21日 T-1（南トレンチ）掘り下げ
- 22日 T-1 挖り上がり、写真撮影、実測、埋め戻し
- T-2（北トレンチ）掘り下げ
- 23日 T-1 埋め戻し完了
- T-2 挖り上がり、写真撮影、埋め戻し完了

発掘調査担当及び作業員は次のとおりである。

【調査担当】行田裕美、坂本心平



第2図 トレンチ位置図 ($S = 1 : 1,000$)

【発掘作業】津山市シルバー人材センター

森二三男、福垣裕史、藤沢淳一郎、梶尾嘉明、谷口末男、福垣光男

3. 調査概要

T-1

調査区の現況は畠地である。現地表面から地山面までの深さは20~40cmを測る。地山面は西から東にかけてやや傾斜している。遺構としては径25cm、深さ26cmのピットが1ヶ検出されただけである。埋土中から土器片1点が出土した。

他に表土中から瓦片・土器片等が若干量出土している。

調査面積は15m²である。

T-2

調査区の現況は宅地内の花壇部に相当する。現地表面から地山面までの深さは約40cmである。地山面は疊まじり層であることから、かなり削平されているものと考えられる。遺構は検出されなかった。遺物としては土器片数点が出土している。調査面積は7.3m²である。

4. 出土遺物

出土遺物の大半は瓦片である。他に、須恵器杯・甕片・腰間出焼椀・甕片・土師質土器杯・小皿片・土鍋片等がある。瓦には丸瓦が若干含まれるが、ほとんどが平瓦である。いずれも遺存状態が悪く、製作手法等不明な点が多いが、観察可能な限りでは平瓦の凹面は平行叩きのものがすべてである。土器は小片ばかりであり、多くを語ることはできない。

5. まとめ

今回の調査区のT-1は美作国分尼寺跡を推定している西側の平地に比べるとレベル的に約2m程度下がった位置に相当する。また、T-2は遺物の出土量が少ないとあげられる。これらのことから、今回の調査区は寺域には直接該当しないものと考えられる。しかし、当概期の遺物が出土していることから、隣接する地域であることには間違いない。

(行田裕美)



第3図 T-1平面図 (S=1:80)

図版 1



T-1 (南から)



T-2 (北から)



T-1 調査風景

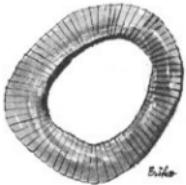


T-1 出土土器



T-1 出土瓦

2. 資料紹介・研究ノート



津山城今昔～大手門の面影～

平岡 正宏

ここに一枚の写真がある。1975年5月に津山市教育委員会社会教育課の春名啓介氏（当時）が撮影したものである。ここは津山城大手門（京橋門）跡である。石垣の上にわずかに見える建物は旧津山高校同窓会館である。春名氏によると、当時この石垣の前すなわち東側に何らかの建物があり、それを撤去した際に裏に隠れていた石垣が道から見えるようになったので、撮影したものであるという。22年前の話である。現在は再び車庫が建設され、この石垣を直接見ることはできない。往時の大手門の名残を示す数少ない写真なので、ここに掲載する。

この石垣についてはその状況が既に考察されており（註）、津山城の外郭の7つの門跡のうち、その遺構がかろうじて現認できる唯一の門であることが確認されている。そこで、今一度写真から読み取ることを整理しておきたい。

写真に写っている石垣は現在南北約15m程度、高さ2m強確認できる。この石垣を観察すると、南側2/3と北側1/3では石の積み方が大きく異なっていることがわかる。すなわち南は比較的大きな石を使用して整然と積まれているのに対し、北は小ぶりの石を使い雑然と積まれているのである。これは南側が本来の津山城に伴う石垣で、北側は後に継ぎ足されたものであるためだろう。さらに新たに積まれた部分については、石垣上端部の当初の石垣と接している点から45度下方に石垣の目地が通っていることが観察される。恐らくは2度にわたって北側に石垣が継ぎ足されたものと考えられる。

一枚の写真の中に残された、現在では見る機会の少ない大手門石垣。日頃目に付かない故に忘れ去られがちな津山城の歴史の証人に、津山城が歩んできた歴史を語ってもらえるよう整備するのが我々の努めであろう。

（註）中山俊紀「津山城今昔」「年報津山発生の里第3号」1996年



津山城大手門西辺石垣東面（北東から。春名啓介撮影）

年報
津山弥生の里
第5号（平成8年度）

平成10年3月31日

発行 津山市教育委員会
津山弥生の里文化財センター
岡山県津山市沼600-1

印刷 有限会社 美成
岡山県津山市平福177-2
